

徳島
の剣道

第 5 号

徳島県剣道連盟

一、剣道の理念

剣道は

剣の理法の修練による

人間形成の道である

一、剣道修練の心構え

剣道を正しく真剣に学び

心身を錬磨して 旺盛なる気力を養い

剣道の特性を通じて 礼節をとうとび

信義を重んじ 誠を尽して 常に自己の修養に努め

以って 国家社会を愛して

広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである

以上

巻 頭 言

徳島県剣道連盟会長 堀 江 幸 夫

激動六十有余年の昭和の歴史の幕が下ろされ、平和と繁栄を願う平成時代が始まりました。ここに「徳島の剣道」第五号をお手元にお届けできることを会員の皆様と喜ぶと共に、平成元年の節目にあたり心を新たに手を携えて前進いたしてまいりたいと思います。

私共の徳島県剣道連盟は、剣の理法の修錬をとおして人間形成を願う者の集団でございます。剣の修錬による人間性の陶冶をいたすその命題の達成のため、お互いに日夜をわかず切磋琢磨いたしております。集団は一即多、その力は一人ひとりがこの至上目標をしっかりと腹にすえ、自信と希望を持って邁進しなければなりません。

今日剣道界も例に洩れず結果重視・優勝劣敗主義の今日的考え方が次第に拡がりをみせ、まことに頭の痛いところでございます。決して精神主義を徒に前面に押し出そうと言うものではありませんが、さりとて競技本位に傾倒する現在の姿勢も好ましいものでなく、このまま放置するわけにもまいりません。剣道が現在の修錬形式になつてすでに三百年近いこの辺でちよつと立ち止まり、三百年の歴史をふまえて新旧の考え方・取り組み方の接点を探らなければならぬでしょう。

一つのを伝えるということは、夥しい人の努力と犠牲の上に立っていることがその道を歩んでみてよくわかります。剣道もそのとおり夥しい先師、先輩の命がけの修業の上に成り立っています。この尊い先人の修業とこころを私共はともすれば忘れがちとなり、目先の近代的風潮に心を奪われて本姿を見失う愚を犯しかねません。

今日の剣道は新旧二つの考え方の接点を探りつつ、如何にして古きよき革袋に新しい酒を盛るか苦悩は深刻です。私共は今こそ伝統と今日的視野に立つて新しく、そうして伝統を生かした正しい剣道の普及と充実に一段と集団の結束を強固にし、平成の新時代に向け発進したいと心より念願する次第です。

目次

巻頭言	1
48 国体への強化	1
徳島の剣道（各パートからの報告）	7
全国大会に参加して	12
わが郷土の剣豪紹介（各支部より）	14
人物紹介（各支部より）	21
剣道随想	26
昭和63年度戦いの跡	29
昭和63年度昇段者名簿	37
平成元年度剣道・居合道昇段審査学科試験問題・解答例	40
平成元年度行事予定表	67
平成元年度役員一覧表	69
平成元年度段級審査実施計画表	72
編集後記	73

△表紙▽

題字 堀江幸夫徳島県剣道連盟会長
絵 伊原秀文徳島県剣道連盟審議員

48 国体への強化

国体（少年の部）強化の流れ

昭和63年

◎	1月4日(月)	～7日(木)	九州遠征
◎	3月27日(日)	～29日(火)	強化合宿
◎	5月15日(日)		国体錬成大会(1年個人戦)
◎	5月21日(土)	～22日(日)	強化合宿
◎	6月11日(土)	～12日(日)	強化合宿
◎	6月26日(日)		県選手権大会
◎	7月24日(日)		県総体
◎	7月28日(木)	～30日(土)	強化合宿
◎	8月16日(火)	～18日(木)	強化合宿
◎	8月21日(日)		国体錬成大会(1年団体戦)
◎	9月24日(土)	～25日(日)	強化合宿
◎	10月8日(土)	～10日(日)	兵庫遠征
◎	11月3日(木)		強化錬成大会
◎	11月13日(日)		強化錬成大会
◎	12月11日(日)		国体錬成大会(1年個人戦)
◎	12月25日(日)	～26日(月)	強化合宿

昭和64年・平成元年

◎	1月4日(水)	～6日(金)	広島遠征
◎	1月5日(木)	～7日(土)	強化合宿
◎	1月22日(日)		県新人大会
◎	3月25日(土)	～29日(木)	九州遠征

◎	3月25日(土)	～27日(月)	強化合宿
◎	3月27日(月)	～29日(水)	強化合宿

兵庫遠征報告

- 一日時 昭和63年10月8日(土)～10日(月)
- 二場所 兵庫県赤穂郡上郡中学校
- 三目的 (1) 48国体を控え、全国大会ベスト8どまりの徳島県中学校 剣道のレベルアップ。

(2) 全国一流の指導者から、剣道に対する熱意を徳島県指導者が学びとる。

四 参加校	中国・四国の強豪チーム	男子	17
-------	-------------	----	----

合計		女子	11
		合計	28

五 参加者

* 引率者

◎	総務	石井 博 (附属)
◎	監督	樫本 英夫 (上八万)
◎	コーチ	本村 賢二 (上板)
◎	マネージャー	西山 伸二 (小松島)
◎	生活指導	住友 健司 (木頭)

* 参加生徒

男子

2 年	西条 守 (阿波)	鈴木 真一 (阿波)
-----	-----------	------------

	小林 隆志 (木頭)	大城 健作 (木頭)
	天羽 洋二 (阿南一)	磯部 健治 (那賀川)
	矢代 潤 (藍住)	

1 年	天羽 将文 (阿南一)	秦野 晃男 (阿南一)
-----	-------------	-------------

松村 芳紀(入田) 喜多 弘(木頭)
 川添 義仁(小松島) 原田 陽博(文理)
 石田 裕貴(八万)

女子 2年

小籾 千鶴(木頭) 中田 有可(木頭)
 田島希実子(阿波) 秋山 千秋(阿波)
 栗栖 早苗(阿波) 宗本 千絵(山川)
 荒井 弥和(附属)
 1年

森 ひろみ(小松島) 田上 恭子(小松島)
 大城 夏子(木頭) 前浦志津代(木頭)
 酒卷 裕美(阿波) 笠松 寛子(入田)
 佐野 由佳(北井上)

六 試合結果の概要

◎ 団体

男子 徳島選抜 2年 13勝4敗1分(0・765)
 1年 5勝9敗4分(0・357)
 女子 徳島選抜 2年 8勝6敗2分(0・571)
 1年 6勝10敗 (0・375)

◎ 個人(強豪チームの選手を相手に勝率5割以上の選手)

男子 2年 磯部(那賀川) 9勝2敗2分(0・818)
 小林(木頭) 9勝2敗2分(0・818)
 西条(阿波) 9勝3敗1分(0・750)
 天羽(阿南一) 7勝4敗1分(0・636)
 矢代(藍住) 6勝4敗2分(0・600)
 大城(木頭) 6勝4敗3分(0・600)
 鈴木(阿波) 5勝5敗4分(0・500)
 天羽(阿南一) 7勝1敗6分(0・875)
 小籾(木頭) 10勝2敗2分(0・833)
 女子 2年 小籾(木頭)

七

他県チームの長所

* 対戦相手が同じではなく、上記はあくまで参考資料。

1年 田島(阿波) 5勝2敗4分(0・714)
 宗本(山川) 6勝3敗3分(0・667)
 荒井(附属) 3勝2敗4分(0・600)
 栗栖(阿波) 4勝3敗3分(0・571)
 森(小松島) 6勝3敗2分(0・667)
 酒卷(阿波) 4勝4敗4分(0・500)

八

参加した28名の生徒がみた他県チームの長所と遠征全体の感想

- ◎ とても礼儀正しい。
- ◎ 監督の話・指示を全力を傾けて聞いている。
- ◎ 強い人がたくさんいて大変良い勉強になった。
- ◎ 他の県のレベルがよくわかった。
- ◎ 強い選手は面がよく打て、早い。
- ◎ 声がよく出ている。
- ◎ よく攻めてき、常に先に先に打ってきた。
- ◎ 動きが早い。
- ◎ おくり足をつかわずそのまま打ってきた。
- ◎ 徳島県チームの仲が良く大変楽しかった。
- ◎ 徳島は寄せ集めのチームなのに、チームワークが抜群に良かった。

九 今後の強化策

- (1) 県外遠征を繰り返す、他県の強豪チームと何回も試合を重ね長所を身をもって感じとる。
 - (2) 県内での強化合宿の実施。特に、クセがついて、技術の向上を妨げている場合、適切なアドバイスを行う。
 - (3) 指導者の研修。今回のような遠征時に引率者として付き添い生徒の世話をするとともに、自分自身も指導方法等勉強する。
- 十 その他
- 今回の遠征で、生徒自身も感じとっているが、他県チームの礼儀正しさには驚かされた。生徒を強くすることも大切ではあるが、やはり、それ以前に日々の生活の中で礼儀正しくできることがもっと重要なことだと感じた。今後の合宿で十分指導していききたい。(文責 石井 博)

広島遠征報告

一日時 昭和64年1月4日(水)～6日(金)

二 場所 広島県比婆郡東城町

三 目的 (1) 48国体を控え、全国大会ベスト8どまりの徳島県中学校剣道のレベルアップ。

(2) 全国一流の指導者から、剣道に対する熱意を徳島県指導者が学びとる。

四 参加校 九州・中国・四国の強豪チーム

男子	21
女子	18
合計	39

五 参加者

* 引率者

- ◎ 総務 石井 博 (附属)
- ◎ 監督 白木 洋一 (藍住)
- ◎ コーチ 斎 浩市 (南部)
- ◎ マネージャー 西山 伸二 (小松島)

◎ 生活指導 住友 健司 (木頭)

* 参加生徒

男子

2年

- 西条 守(阿波)
- 鈴木 真一(阿波)
- 小林 隆志(木頭)
- 大城 健作(木頭)
- 磯部 健治(那賀川)
- 矢代 潤(藍住)

1年

- 天羽 将文(阿南一)
- 弘田 誠(南部)
- 松村 芳紀(入田)
- 中山 真治(木頭)
- 石田 裕貴(八万)
- 川添 義仁(小松島)

女子

2年

- 小籾 千鶴(木頭)
- 田島希実子(阿波)
- 秋山 千秋(阿波)
- 栗栖 早苗(阿波)
- 宗本 千絵(山川)
- 荒井 弥和(附属)

1年

- 森 ひろみ(小松島)
- 大城 夏子(木頭)
- 前浦志津代(木頭)
- 酒卷 裕美(阿波)
- 笠松 寛子(入田)
- 佐野 由佳(北井上)

六 試合結果の概要

◎ 団体

男子 徳島選抜 2年 19勝8敗2分(0・704)

女子 徳島選抜 1年 6勝15敗2分(0・286)

徳島選抜 2年 23勝4敗2分(0・852)

1年 15勝8敗3分(0・652)

◎ 個人(強豪チームの選手を相手に勝率5割以上の選手)

男子 2年 小林(木頭) 17勝5敗1分(0・773)

矢代(藍住) 13勝4敗5分(0・765)

西条(阿波) 13勝5敗5分(0・722)

指導者講習会

* 対戦相手が同じではなく、上記はあくまで参考資料。

女子 2年

鈴木(阿波)	11勝7敗4分(0・6・11)
磯部(那賀川)	12勝8敗2分(0・6・00)
天羽(阿南一)	12勝5敗5分(0・7・06)
小藪(木頭)	20勝1敗4分(0・9・52)
田島(阿波)	14勝2敗8分(0・8・75)
荒井(附属)	13勝3敗8分(0・8・13)
秋山(阿波)	15勝4敗5分(0・7・89)
宗本(山川)	14勝7敗3分(0・6・67)
栗栖(阿波)	11勝6敗7分(0・6・47)
大城(木頭)	12勝2敗11分(0・8・57)
森(小松島)	15勝4敗7分(0・7・89)
佐野(北井上)	9勝7敗10分(0・5・63)
前浦(木頭)	10勝8敗8分(0・5・56)

◎ 日時 昭和63年11月19日(土)

◎ 場所 眉山会館

◎ 講師 川上 岑志先生(PL学園高校剣道部監督)

◎ 司会 「はじめに、PL学園につきましては皆さん、十二分に御存じ

と思ひますが、47年から62年まで5回インターハイの男子団体優勝という、他の高校にない素晴らしい実績を上げられております。PL学園高校の剣道部につきまして、いろいろお話を頂きたいと思ひます。川上先生、現在のPL学園剣道部の部員の総数並びに男子女子の現在数、指導者は何人ぐらいでされておりますか？」

川上先生 「わたしどもPL学園剣道部は高校生は新学年10名、これは男子です。女子のほうは制限はございません。男子のほうは『剣徳寮』という寮がございますので、その寮の枠が1学年10名しか取れないわけです。高校は30名が限度です。だいたい、やめていく人もおりますので、現在は

28名おります。女子の方は無制限ですけども、創部致しましてまだ7年ですので、20名です。あと中学生の男子がおりまして、総員63名です。指導者は私一人でございます。あとは講師の先生を、大阪府警元主任師範であった園田先生、現在師範の島野先生、そして、助手の岡本です。3人の講師を雇って、私が一人で孤軍奮闘してやっている次第です。これがないの剣道部の概略です。」

◎ 司会 「平日の練習時間並びに土曜日、日曜日の練習時間、そして夏・冬・春の長期の休みの練習時間、あるいは、1年間の練習の内容を教えてくださいましたらと思います。」

川上先生 「平日の、月・火・水・木・金、これは、高校生の男子の場合は、朝6時から6時半までトレーニング。午後は2時40分から6時まで。女子の場合は、朝、月・水・金と火・木・土の二組に分けて、6時から6時半までトレーニング。午後は4時から6時まで。中学生は、朝のトレーニングはなしで午後4時から6時まで。これが平日でございます。土曜日はトレーニングの時間は男子の場合は同じで、6時から6時半までです。女子がありましたら、6時から6時半まで。午後は2時から6時まで、これは高校男女・中学一緒でございます。日曜・祭日は午前9時より12時まで、午後3時より6時まで、これも中学男女とも一緒でございます。休みに入りますと、これにトレーニングを加えます。日曜・祭日のいかにかわらず、トレーニングを午前の6時から6時半までやります。中学生はございません。」

◎ 司会 「大阪府警の小林主席師範のお話の中に、PL高校の剣道について語られる中に、『非常に社会人になっても活躍できるのは、基本ができてくるからです。』というお話がありました。が、他の学校でも、基本というのには重視してやっていると申うんですが、PL学園について特に基本がしっかりしている、というお言葉が出るということは、練習時間の中で基本打ちの占める割合はだいたいどれくらいなのでしょう？」

川上先生 「できなければ、全部が基本の練習にするようなこともありませぬ。口はばつたい言い方を致しますと、私も大阪に出てきまして、大阪府警をずっと見ているわけなんです。が、そうしますと、結局、先鋒・次鋒で

終わる先生は最後は大成されてないです。やっぱり、大将・副将を引き受けてやられる先生が大成されているんです。それを見て感じることは、やはり小手先でやっている剣道は将来大成しないんじゃないかというふうに……。と私は思っています。それをまた、実行させておられます。特に、面の振りかぶりですと、あくまでも相手が見えるところまで振りかぶらせません。それができてから色んな動作に入るといことをしています。ということは剣道の基本的なことになると思うんですが、それは肩の関節、肘関節が全て自由に動くようにならないと、今、言うような『小手先』になるんじゃないか。あるいは呼吸が本当にお腹からお腹に行くようにならないと、小手先になるんじゃないか。やっぱり『半気』であるとか、ちよつと相手を引っ掛けるということは、非常にこう……見た目には非常にいいんですが、やっぱり決勝・準決勝にいけますと、半気というのは使えないんですね。だから練習の時に、確かに半気ですと、非常に楽ですし、技も自由自在に出ると思うんです。それが、準決勝・決勝の時になって、それだけの度胸の据わった人間がおるかという、まあ、私はこれまでに見たことがない。平素の練習は気合い一杯にやっておかないと、いざ、その時になった時にやられてしまう、という考えです。」

司 会 「先程は、男子団体優勝のお話をしましたが、女子も昨年度、全日本女子選手権で、川俣選手が、高校生で優勝という、非常に立派な成績を取っておりますが、男子、女子、両方の剣道部を持たれて、現在、今、練習している場所をどういうふうに使われているのか、例えば、男子と女子を同時に見られるのか、別々に見られているのか？それと、先生のお話しされた記事の中に『男性より女性のほうが、熱心に頑張る』というようなお話も内容にありましたけれども、そういう男子の剣道部、女子の剣道部の指導の違い、あるいは、現在、男女の……両方、先生が指導されていると思うんですけど、その辺を教えてくださいと思います。」

川上先生 「バレーボールでニチボウ貝塚が優勝した時に、やはり女子らしく、爪とかを伸ばしておいた。という話を聞いております。私も剣道をよく考えます時に、やっぱり、女子は女子の指導をしなきゃいけないんだ。それは、何がポイントか？と考えますと、女子には、ふてくされたらダメ

なんですわね。だから、女子が、ふてくされんように指導しないといけない。女子がふてくされてから、『やれ！』って言ったって、むこうは大きな顔してるし、こっちは小さい顔してたら、もうやれませんよ。女子は、ふてくされたら、もう、そこでダメだから、どんなきつい練習をやってもですね、女子が『思い切つていこう！自分がいくんだ。』というふうに稽古に励んでいかせるわけですね。男子の場合は、これは全く違う。逆です。もう本当に、鍛えて、鍛え倒して、そりゃ、ふてくされたら、よけい鍛えてやる。そういうふうな極端なことをやっております。」

司 会 「川上先生ご自身がPL高校の剣道部の生徒を指導される場合に口癖のように言うこと、特に生徒に頻繁に言うような言葉がありましたら、お願い致します。」

川上先生 「生活態度の悪い人間はダメだと思うんですね。『気がつく』ということがあると思うんです。剣道の試合でも気がつかなきや、相手に勝つことができない。生活態度の良い人間……やんちゃしても構わんと思わんですが、いわゆるダラケた、というか、これでいいやという……それから、気がつかない生活を送っている生活態度の人間は、勝負に向かない。やはり、塵が落ちていけば拾う。あるいは人がしんどそうにしていけばそれをかばう。そういうふうな気がつく人間が、結局は勝負の時に気がついてくれるんじゃないか、という考えを持っております。生活態度だけはきちりとする。生活態度がダメだったら勝負に負けるという考え方です。それは、口やかましく言ってます。それと、100%の力を持ってながら、80%で練習を終える人間ですね。それも厳しく言っております。『力いっぱい練習しろ』と、80%でやっているのは、技術が向上しないんです。そのままで終わります。『気迫一杯で、技術一杯、自分を捨てていける稽古をしろ』と言っています。勝負の時も私はあまり『勝て』とは言わない。ただ、悔いのない試合をするように。それで、稽古でも自分の身で覚える。自分の体で覚えるまで技術を修得しろ。80%の力で剣道をやっていたら、頭の中で剣道はできますが、体では剣道はできない。だから、体が自然とその場に即した時に適する、とっさの場合に、そこまでいっていないと勝負は勝てないんじゃないかというふうに思っていますし、私もそういう体験が随

分あります。そこへ持っていくようにさせてるんです。僕は、そこまでいいかないと本物じゃないと思う、と考えます。」

司 会 「最近、非常に少年剣道が盛んです。ただ、途中でやめてしまう子供もかなりいると聞いております。それで、少年剣道あるいは中学生、そういうまだ成人していない子供達が、ある程度興味を持って続けて、剣道に取り組まれるような、何かポイントがありましたら教えて頂きたいと思えます。」

川上先生 「僕は、剣道の選手が強くなるのには、親と本人と指導者が一体とならなきゃいかんとダメだと思います。親がですね、夫婦が仲が悪いと、これまた、ちょっと具合悪いです。親ごとさんと子供さんとそして指導者が一体となった時に、そのお子さんを育てることができるとしてですね、最近の例で言いますと、野球の立浪とか、あるいは私どもの、全日本で優勝しました川俣は、これは、片親ですね。片親でもですね、お母さんの片親ですけれども、これがしっかりしていると、ああいう立派な子供ができるんですよ。もしも、この子供を立派にしようと思うなら、本当に先生に預ける。そして『何とでもして下さい』というふうな、そこまでは、割り切って先生に預ける。それで、本人も『何とかやりたい、何としてでも、自分はあるんだ』というそういう気迫と情熱があるといいと思えますね。そして、また、教えるほうですね、今度は。僕なんかでも、こう年を取ってきますと、いわゆる中学校、高校男女と持っていますとですね、笛を吹いたほうが楽なんです。あるいは、太鼓を叩いたほうが楽なんです。ところが、その子供を本当に強くしようと思ったら、やっぱり、自分が面を付けてその子供とぶち当たらないと、本当に意識が通じ合わないのです。それが、PLの剣道は何か違うことをやっているんじゃないか？というふうな事をよく言われますけれども、その一つに、僕が、目で見てると、ものすごくしっかりやってるんです。ところが、面を付けて当たってみますと、怠けてるんです。わずかなことなんです。これは、自分の肉眼では分からないんです。その子の生活状態も、その子の持っている性格も、分かっても抜ける。だから、本当に、その子を一人前にしてやるうと思ったら、やはり、自分が稽古着をつけて、その子にぶち当たらないと

ダメなんです。このところが一番大切なところであるし、また、先人の方が、剣道で苦勞されて、お年を召されてるのに、子供と稽古をする。『なんで、あんな辛いこと、されるのかなあ？』と思うんですけど、それは、その子供、あるいはその道場に、非常に愛情を持ってられるからだというふうな思っております。」

司 会 「ズバリ、監督勝負のポイントをお願い致します。」

川上先生 「大変難しいことですね。僕の力で勝ったって事はそりゃないんじゃないですかね。ここ一番にきましてね、例えば、決勝戦に入ってから選手を交代させたりなんかしますけどもね。それは、やっぱり、相手のチームの編成を見ましてね、私のほうの補欠が見込みがあると思いうから替えるわけです。そこで、補欠を温存するわけです。だから、私の学校の子供には補欠だと思ったら大間違いだって、『ここ一番』だと思ったら出す、かもしれない。常にそういう気持ちを養ってほしい。気迫を養ってほしい。野球のピンチヒッターと一緒にですよ。ピンチヒッターになつてからバット振りしたんじゃないやダメですね。ずつと始めからバット振りをしよつて、『ピンチヒッターだ』つて言われたら最高の出来で行けるように、だから、補欠でもそういうふうな、いつ替えられるか分からないような状態を作るんですよ。逆に考えますと、選手も『いつ替えられるか！これは、かなわん』と思つて替えられないように力一杯やります。『十分に練習中に泣いて、試合では泣くな！』と。まあ、今は最近、女の子はですね、結婚式に行つて、おめでたい席でも泣きますからね。だから、そういう子供さんを泣かせないようにするのは大変なんですけども、でもやはり、そういうことを話して聞かせますとわかると思えますね。だから、『試合では絶対泣くな！試合に勝つた時は、ざまー見ろ。これで、どうだ。それがどうした、つてような顔をしろ。安心したらいけないけれど、それぐらいのものを持って。そして、その代わり、明日からは辛い練習、明日からは死に物狂いで次の頂点に向かってやっつていこう！』というようなことを言つてますね。

(注・長時間の講習の一部分だけ掲載させていただきました。)

徳島の剣道

各パートからの報告

一般

徳島県剣道連盟事務局長 坂下 彦之

県内の大会では、三者対抗（教員・警察・実業団）が警察、全日本選手権県予選は米倉（県警）が優勝。段別選手権は六段近藤（県警）、五段吉田（県警）、四段玉田（脇町高校）、三段岡川（県警）、女子三段以上島野（名西支部）がそれぞれ優勝。社会人大会は、阿南支部Aが優勝。十一月十九・二十日は、川上岑志先生（PL学園高校剣道部監督）を招待。県内約百名の指導者を集め、講習会を実施した。

女子

徳島市立高校教諭 塚 十三子

高校における女子部員数は男子を凌ぐ勢いであると言われていたが、五月に行われた全日本女子選手権大会に桶選手（富岡東高）が初出場ながら健闘、四国総体では富岡東高が見事連続優勝、川島高も第三位という好成績を挙げ、また全国総体においても富岡東高は、高校女子剣道界のトップクラスを常に維持している高千穂高を相手に代表戦へ持ち込むという実力ぶりを発揮しています。

今年度は「女性らしさ」を考慮した剣道にスポットが当てられ、八月には

全国家庭婦人大会を控えて全剣連主催の女子を対象にした全国レベルの講習会も開催されるなど、正に剣道を通して女性が生き方を問う時代がきているといえそうです。

第七回を迎えた県下女子大会も定着し、回を重ねることに充実の度を増しております。そして平成元年度の国体から少年女子の部が加わることになり女子剣道レベルアップに一層拍車がかかるものと期待、さらに48国体の主役であります中学生の皆さんのたゆまざる努力を切望いたします。

我々女性が剣道に取り組む場合、男性と比べてたくさんの厳しい環境があります。その一つ一つはより自己に厳しい稽古を重ねることによって解決の方法が見えてくると思います。

子は親の後ろ姿を見て育つと言います。それを思う時私達女性に課せられた任務は重大です。剣の中に生きる姿勢が表現できるように女性剣士の皆さん共に頑張りましょう。

大学

眉山杯会長徳島大学 勝 沼 信 彦

徳島県下の剣道大学生個人選手権大会が発足しました。第一回は昭和63年11月21日（日）に徳島大学、徳島文理大学、四国女子大学、鳴門教育大学の4校学生男子55名、女子20名の計75名が集い、徳島大学常三島体育館で開催されました。此の会は徳島大学全学の剣道選手権として7年前に発足し、第七回大会から徳島県剣道連盟の御支援により県下全大学生の剣道選手権に発展いたしました。平成元年の第二回大会は11月又は12月に開催予定であります。

本大会が県下剣道界の御指導と御支援により益々発展させていただけるようお願い申し上げます。なお当分の間、事務的お世話には徳島大学剣道部がさせていただきます。

高 校

城ノ内高校教諭 西 谷 肇 一

本年度の各種大会を振り返ってみると、四月の会長杯争奪剣道大会は男女共に富岡東高校がアベック優勝し、続いて男子では富岡西、川島と続き、女子では川島、富岡西と続いた。六月の高校総体では、男子団体会長杯の雪辱を果たして川島が優勝し、続いて富岡東、小松島、富岡西。女子では四年連続で富岡東が勝ち、脇町、富岡西、川島の順であった。また、個人戦では、男子一位福多（富岡西）、二位岩原（東工業）、女子は一位近藤（富岡東）、二位工藤（川島）で全国総体の出場権を獲得した。

四国大会（高知市）では、個人戦女子で近藤選手（富岡東）が三位に入賞したのみで男女とも1、2回戦止まりであった。しかし、団体戦においては富岡東高校女子が二連覇を果たし、川島高校男子が九年ぶりに決勝進出し、準優勝に輝いた。なお、全国総体（赤穂市）では富岡東がベスト8をかけて一昨年優勝の高千穂（宮崎県）高校と対戦し、代表決定戦になるまで追いつめたがあと一歩及ばなかった。また、個人女子工藤（川島）、男子福多（富岡西）が3回戦まで進出した。

国体では、福多（富岡西）、長井・北村（川島）、松永・香川（富岡東）と昨年のメンバー四名が残り期待されたが一回戦で東京都に敗れた。

本年度最後の新人大会では、男子富岡東が富岡西と接戦の末大将戦で逆転優勝、三位に川島。女子は脇町が波に乗り三対一の大差で富岡東を敗り15年ぶりの優勝、3位に城ノ内であった。

本年は四国で男女共に好成績を上げ、全国のレベルに少し近づいた。しかし、来年度は各校の県外での練習試合等の状況を見てみると非常にきびしい状態である。各校共指導者の先生方の奮起を促したい。

中 学 校

附属中学校教諭 石井 博

六月の選手権大会では、男女とも木頭・阿波の伝統校同士の対決となり、男子は阿波、女子は木頭がそれぞれ競り勝った。

七月の総体では、昨年に引き続き男子とも木頭がアベック優勝。個人では、男子三年近藤（宮浜）、二年銭形（高浦）、一年天羽（阿南一）、女子吉岡（那賀川）が優勝した。

四国総体では、木頭男女が共に準優勝。全国大会では、木頭男子が予選リーグで昨年の優勝校北茂安中を破り、決勝トーナメント進出。大活躍した。

新メンバーになった新人大会では、男子是那賀川が阿波を下し、女子は木頭が阿波を下した。

10月と1月には、それぞれ兵庫と広島へ遠征。男女一・二年それぞれ6名ずつ総計24名の徳島県中学校剣道優秀選手が県外で腕をみがいた。

3月には、大阪体育大学の作道正夫先生を招待して、中学生を対象にした講習会を実施。県内約百七十名が参加した。そして、3月26日から九州遠征を実施。レベルの高い九州の剣道に接し、多くの長所を学んできた。

国体まであと5年。一つ一つの行事を大切に、中学校指導者がスクラムを組んで、質の高い活動が続けていきたい。

居 合

高 橋 憲 司

年度最初の行事として四月の第一日曜日には、全日本居合道大会及び近県で開催される大会への県代表選手の選考を兼ねた県下段別選手権大会を開催していたが、本年度はさらに居合道の基本に立ち返ると同時に、各自の技量向上を図る事を目的に春季にも講習会を開講し、その講師に全剣連居合道委

員・範士八段澤田友信先生をお迎えして、全剣連居合及び古流についての研鑽を会員多数の参加があつて深めた。

四月に大阪八重垣会大会には各クラブ単位で参加をし、七月には県単位で三日に大分居合道大会と、十日に香川居合道大会に参加をし、後者において高橋選手が六段の部において優勝を果たした。

九月十一・十二日の全剣連主催・居合道中央講習会には、本年度は平尾・高橋両受講生が派遣せられ、後の九月二十五日に鴨島一中武道場において受講した内容についての伝達講習会を開催した。

十一月十二・十三両日には大阪の福田範士をお迎えして、恒例の秋季居合道講習会を実施し、各自が心技の向上に努めた。十九日の東京での中央審査会には、高橋・小野寺・前田の3名が七段受験に臨み、3名共合格を果たした。

演武参加としても九月二十三日の中央武道館落成のセレモニー参加を含め、県下の剣道大会・武道館開館記念大会・女子剣道大会・社会人大会への演武参加が認められてその活動の場が広がりつつあるが、機会ある度に基本に立ち返って自己研鑽を怠らぬ事こそ、その道の礎であるとの感を強くしている。なお旧武道館での練習会は十月から新たに中央武道館にその場を移し、新たな会員も増えて現在各自が熱心に稽古に励んでいる。

全日本高齢者武道大会

剣道A組全国優勝勝浦守先生

徳島県高齢剣友会理事長 清原 栄

十周年記念大会が日本武道館にて六月六日、盛大に開催されました。大会は、回を重ねる毎に参加者も多くなり、徳島県からも二十四名という多数参加いたしました。中でも、剣道A組（七〇歳〜七四歳）が一四六名もあり、四コートのトーナメントで四コートの代表者決勝があり優勝までには七回勝抜かねばなりません。勝浦先生は、準決勝までストレート勝でありました。

決勝戦は、昭和六十年第七回の優勝者京都杉本茂七段で体格も大きく、堂々たる選手でありましたが、一対一のあと二本目を、得意技のメンで決め見事優勝し、徳島県初の全国制覇をとげました。

第三回徳島県高齢者剣道大会

九月十八日（日）鴨門武道館で本部から松島猛理事長はじめ堀の内・鈴木両理事のご臨席を賜り盛大に開催いたしました。成績は次の通りです。

- 個人
- 団体
- 優勝
- 準優勝
- 第三位
- 新道館

A組	石井克太郎	蝦名 久作	平岡 竹雄
B組	広瀬 清	乾 寿夫	出口 嘉平
C組	株木 芳夫	遠藤 一美	高田 亮
			兼田 繁
			浜田 逸郎
			美馬 政雄

徳島新聞での剣道の話題

高校総体ホープ群像―剣道

気迫で上位を目指す

富岡東高3年 楠 正代選手

三月二十一日、県武道館で開かれた第二十七回全日本女子剣道選手権大会（二日・大阪市中央体育館）県予選の決勝リーグで、昨年のインタハイ個人

ベスト4の林美枝（富岡東高出・馬原医院）に競り勝つなど全勝し、本県の高校生として初めて全国大会への「切符」を手にした。

全国大会では予選リーグ突破はならなかったものの、「いい勉強になりました。」高校レベルをはるかに上回る全国強豪の技のスピードや切れ味の鋭さに驚き、何より相手を倒そうとする各選手の気迫が印象に残ったという。

「この経験をチームのために、自分のために生かしていきたい」とキッパリ。

得意技は飛び込み小手、引き小手系統。二年生の昨年、団体戦でインタハイに出場したが、個人戦は県総体3位で出場権を逃した。しかし、四国高校総体個人で小手技を武器に優勝。市場小、市場中を通じて大会と名のつく試合で初めての優勝を飾り、「一番思い出に残る試合」とにっこり。

また、「あの悔しさは忘れていない」ともいう。楠が指す「あの」とはベスト4入りを目前に敗れた昨年のインタハイ団体準々決勝（1-3前橋商）のことである。1-1の副将戦で「緊張して自分の試合ができなかった」という楠は小手を続けて二本取られてしまい、大将の林にうまくつなぐことができなかった。

新チーム結成後は県レベルの大会をすべて圧勝しているチームの大将。同じ失敗を繰り返さない——ことを肝に命じ「攻めの剣道で、インタハイ団体、個人とも上位入賞したい」と表情を引き締めた。

（S・63・5・18）

スポーツ随想

技も心も日本一

県剣道連盟の主催するさきほどの中学生強化合宿に、全日本選手権者の西川清紀先生（警視庁）を講師としてお迎えした。

西川先生は、まだ三十三歳という若さであるが、各種大会で大活躍しており、その実力は関係者のだれもが認めるところ。

伸び盛りの中学生に、何とか本物の剣道に触れる機会を作りたいというわ

れわれの願いが通じたのか、忙しい合間をぬって徳島へ来て下さることになった。

「白聞は一見にしかず」という言葉があるが、今回、西川先生をお招きして、その感を強くした。各種の模範練習をしていたのだが、本当に素晴らしい剣道で、理屈抜きに立派な剣道ですね」としか表現のしようがないほどであった。

西川先生と身近に接し、素晴らしいその人となりを表すエピソードを紹介しよう。

第一日目の昼。模範練習のあと休憩。面をとって一息いれてから再度練習。中学生の代表者六人と地げいこ。十分程度だったが、面をとると流れるような汗。私は本当に驚いた。日本の剣道の最高レベルにある警視庁で毎日四、五時間も練習されている先生が、中学生相手の短時間の練習で、玉のような汗を流されるとは。

先生の好きな言葉は「生懸命」「真剣」だそう。なるほど中学生相手に精いっぱい力を出し切って下さった姿を見て納得した。

一日目の夜は先生を囲んでささやかな夕食会が開かれた。話も弾み、夜遅くまで歓談した。夕食会の始まる前に、次の日の朝はゆっくりお休み下さい——とお勧めしてあったが、夜遅くまで話しているうちに、徳島の朝げいこへぜひ参加したいとおっしゃられた。

次の日の朝、六時四十分。宿泊所の部屋までお迎えに行くと、中から剣道具を身に着けた先生が出てこられた。心も体も完全にできあがっている状態で、いつでもけいこが始められる雰囲気だった。

「朝早くから申し訳ないですね」と言う。「徳島へは、自分のけいこをしに来ましたから」とさわやかに言っているのけられた。超ハードスケジュールにもかかわらず、最初から最後まで一切の手抜きなしの真剣さ。技も心も日本一を思い知らされた二日間であった。

（県中体連県専門部長・石井博）

（S・63・5・20）

優秀選手らを発表

—— 県剣道連盟 ——

県剣道連盟（堀江幸夫会長）はこのほど、六十三年度県優秀指導者二人、県中学校優秀選手三十三人を発表した。優秀選手は男子二十二名、女子十一人で、県総体男女団体二年連続優勝の木頭から九人が選ばれた。

【優秀指導者】

河田清美（富岡東高教）、臼木崇（県中央武道館）

【中学校優秀選手】

男子 中野威洋・西岡洋幸・藤田恭嗣・中山政人・早川大悟・中田清文・谷健二郎（以上木頭）、植木淳・北川忠司（以上鴨島一）、牧本幸雄・松村啓之（以上市場）、秋山宣輝・中川昇・塩田賢・坂本晋（以上阿波）、近藤淳司・橋本忠久（以上宮浜）、山室雅幹（藍住東）、杉本孝之（阿南）、原憲秋（鳴門一）、西村博（相生）、川西文男（阿南一）

▽女子 小藪香・前浦一代（以上木頭）、吉村幸恵・坂東みどり（以上阿波）、吉岡路・岡本明子（以上那賀川）、谷本美加（勝浦）、岸上めぐみ（穴吹）、日野ちあき（小松島）、亀田雅代（市場）、宮本里香（阿南一）
(S・63・10・25)

四国インタハイ専門部長に聞く

剣道

女子は4強入り目標

男子 31校 310人
女子 24校 210人

—— 西谷 肇一先生 ——

◆女子が過去十年間で五度、団体または個人でベスト8以上に食い込んでいるが。

「女子の上位グループは現在、全国ベスト16―8のレベルに達していると思われる。しかし、男子は全国レベルにはまだまだ遠い。男子は女子と比べて、中学生の有望選手が高校進学時に分散し、強いチームが生まれにくい原因となっている」

◆競技人口は全国的に見てどうか。

「少ない県の部類に入る。専門部としては底辺拡大を目標に掲げ、中学校との関係を密にして選手確保に懸命だ。二十歳代の指導者が近年増え、ムードは良い」

◆どのような強化策を取ってきたか。

「東四国国体も控えており、五年前から県連盟の協力で春休みに他県の有力チーム（男女各一校）を招いて本県ベスト8のチームと二泊三日の合宿練習で交流試合を行っている。このほか四国選手権前にインタハイ出場校の強化合宿も行った。十一月の選手権（個人戦）も制限をなくして希望者全員が参加できるようにした」

◆有望校、選手について。

「団体は女子・富岡東、男子は富岡西に期待がかかる。個人では選手権優勝の男子・福井昭浩、女子・近藤加奈子の富岡東勢ら。例年に比べ小粒で状況は厳しいが、女子はベスト4、男子は予選リーグ突破を目標に置いている」

◆一月に新人戦を終えたばかりだが、これからの五カ月間に克服すべき課題を。

「各校の事情もあるが、練習の絶対量が少ない。勝負は結局、どれだけ練習をやったかで決まる。また突かれたら突き返すぐらいの気迫を持ってもらいたい」

(H・1・2・9)

全国大会に参加して

第36回全日本剣道選手権大会

徳島県警察本部（機動隊） 米 倉 滋

私は、昭和六十三年十一月三日、日本武道館において行われた第三六回全日本剣道選手権大会に本県の代表として出場しました。各種大会の中でも最も盛大に行われる全日本選手権大会に出場できたことは大変名誉なことであり、本県の代表選手として立派な試合ができるように心掛けて試合に臨みました。一回戦は、千葉県代表の柿原選手と対戦しました。柿原選手は、小兵ながら技の切れが良く、大学時代から全国大会等で活躍している強豪選手です。試合は、私が出頭を狙って技を仕掛け、それを相手がかわすという展開になりました。試合が終盤にさしかかったとき、私が技を出すのを一瞬ためらった隙に、突から面へと渡られ、面を先取されました。その後、互いに有効打突なく時間切れとなり、一本負けを喫しました。

結局、大会は、決勝戦で北海道の林選手が埼玉県の大沢選手に一本勝ちし、二度目の挑戦にして初の日本一の座に着きました。今大会の特色の一つに、このような若手選手の活躍が目立ったことがあげられますが、その中にあって、一〇回出場を果たした富山県の大門選手、東京都の西川選手が全日本剣道連盟より表彰を受けるという一面もありました。

私は今回で五回目の出場ですが、今後益々練習に励み、全日本選手権大会優勝を目指し、何回でも挑戦したいと考えております。

第27回全日本女子剣道選手権大会

富岡東高等学校 楠 正代

五月二日、大阪府中央体育館で行われた全日本女子剣道選手権大会に出場した。試合場に入るとまわりは警察官や大学生など、どの選手を見ても落ち着いている様子だった。その中で私は緊張と不安とでその場所から逃げ出したい気分だった。

試合は四人ずつで予選リーグが行われた。私は心の中で、負けてもともとと、と呟きながら捨て身で試合に臨んだ。結果は、三試合して鹿児島県代表の吉村選手からメンを一本取ることができただけで全敗だった。自分では捨て身で攻めたつもりだったが、気の迷いと全日本女子剣道選手権大会という大会の大きさを知らされ、「山々雲」という言葉を改めて感じさせられた。

結果は良くなかったが、この大会に出場できて本当に良かったと思う。今まで四国大会やインターハイなど多くの試合を経験してきたが、それまでにない気迫と攻めのあるすばらしい試合を見ることができ、いい勉強になった。そして私に新たな目標を与えてくれた。この目標に向かって日々の練習の積み重ねを大切に、本物の剣道を目指し頑張っていきたい。

第35回全国高等学校剣道大会

徳島県立富岡東高等学校 近 藤 加奈子

八月三日から五日にかけて兵庫県赤穂市で行われた全国高等学校剣道大会に県代表として出場しました。予選リーグの組み合わせは、夏休み初期から知っていて昨年ベスト8で負けてしまった前橋商高には必ず勝ちたかった。え勝負はどうであれ、気迫だけは負けたくありませんでした。予選リーグは初戦秋田西高とは、緊張したままの苦しい試合でしたが勝つことができました。次はいよいよ前橋商高。全員の気迫も盛り上がり業な試合ができたよう

に思います。予選リーグ二勝で上がった決勝トーナメント初めから優勝候補の高千穂との対戦です。私達は「全員で一本」を目標として胸を借りるつもりで試合に臨みました。しかし、多くの人の声援で大きなプレッシャーを感じながらも自分達の剣道ができたと思います。だから、あの高千穂に二対二代表戦で負けはしたものの今後の試合へのステップができたのだと思います。この大会で学んだ「やればできる」と、いうことを心に置きもう一度全員で今回以上の感動を味わいたいと思います。

第十八回全国中学校選抜剣道大会

木頭中学校 中野 威 洋

今回の全国大会は、去年より不安も少なくリラックスしてのぞむことができました。なぜかといえば、二度目でもあるし、また夏までに何回となく他県に遠征して、強豪チームと練習試合をさせてもらったり、各大会に出場したりして試合数をこなし、ある程度全国大会の感じをつかんでいたからだと思います。

しかし全国大会ともなるとそうあまくはなく、僕達は目標まであと一歩のところまで敗退してしまいました。僕は、ベストエイトぐらいまではどのチームもあまり差はなく、それ以上のチームが、強さでとびぬけている全国レベルのチームのような感じを受けました。特に準決勝や決勝に出場していた選手達の剣道は、僕達のような生易しい剣道ではなく、強く厳しい剣道でした。彼らはそうとう厳しい練習を積んできたのでしょう。僕の目では、彼らの決定的な弱点を見つけたことはできませんでした。そして彼らの試合を見ながら、「彼らのように、がっちりした足腰や、強い気持ち、また技術を身につけるためにもっと努力しよう。」と思いました。僕は、これからも剣道を続けていく以上、少しでもいいから彼らに近づけるようにがんばっていきたいと思います。

そしてこのようなことを体験させてくれた全国大会に出場できたことを、

本当によかったと思っています。

第二十三回全日本居合道大会

監督 原田 勝

昭和六十三年十月九日大阪府立体育館において全日本居合道大会が開催され全国より四十五チームが参加して都道府県対抗優勝試合が行われました。本県からは七段の部に平尾勝美選手、六段の部には高橋憲司選手、五段の部に古岡修一選手の三名の精鋭をもって参加しました。本県勢の戦績は次の通りであった。

七段の部は惜しくも一回戦で敗退となり六段の部においては三回戦まで進んだが僅少の差で惜敗し五段の部も同じく三回戦で敗れ残念な結果となりました。各選手共に善戦ではあったがいま一步の感でありました。これも偏に監督の不徳の致すところと深く反省する所でありました。又各段の優勝者は七段の部には広島島の井手選手、六段の部には大阪の東口選手、五段の部には東京の金田選手の各三名であり、総合優勝には地元大阪チームが見事その栄に輝きました。又個人演武においては五段から七段までの演武者と八段以上の先生方の模範演武者合せて四七六名の参加者となり大変盛会のうちに終了しました。今後居合道部においては次回名古屋市中で開催される第二十四回大会の優勝を目指し部員一人一人が心を新たにして益々修練に励み部の総力を上げてこれに取組み剣連の期待に答えなければならないと痛感しております。

わが郷土の剣豪紹介

〈徳島支部〉

範士 高島 永吉



「明治二十四年十二月一日、岡山県邑久郡大宮村宿毛（現・岡山市幸地崎町）に池内末吉の三男として生まれた。

郷里の尋常高等小学校長・岡田義孝に剣の手ほどきを受け、騎兵隊で三年間の軍隊生活を送り、除隊後、京都の武道講習科（武道専門学校の前身）で厳しい修業を重ね、

大正七年二十六歳の時、大日本武徳会徳島支部の専任教授として着任。警察、師範学校、商業学校、刑務所、旧徳島中学校（現・城南高校の前身）等の剣道教師を務め、多くの人材を育てた。この間、故吉本彦吉範士の次女・米子と結婚、高島家を継ぎ二女をもうけた。

師の剣道の神髄はその軽妙な足さばぎにあり、往年の剣を知る人は、『玉を転がすような足さばぎ』、『氷の上を滑るような足さばぎ』と讃え、その足さばぎより繰り出される小手、面の秀技に感嘆した。

身長一六五センチメートル前後、体重中ぐらいいで、体格的には恵まれている方ではないが、機敏な運動神経と何事に対してもコツコツと努力する粘り強い性格により、その見事な剣技と人格を大成し、皇紀二千六百年奉祝・榎原神宮奉納全国剣道大会（昭和十五年四月）においてベスト8入り、同年六月の天覧武道大会の指定選士に選ばれるなど、『剣道界に高島あり』と、その雄名を全国に轟かせた。

太平洋戦争の敗戦により武道は一時中止となり、郷里の岡山で農耕にいそしんでいたが、知己や門弟の招きもあり、昭和三十一年徳島に帰り、再び剣

道の指導を始め、翌三十二年五月・八段、翌三十三年五月・範士の称号を授与された。昭和三十四年から五十年まで県剣道連盟副会長、没年まで名誉会長を務め、無口ではあるが、その誠実・謙虚な人柄をもって、本県剣道界の要としての役割を果たし続けた。この間、昭和四十一年十一月には、それまでの功績が認められ、勲五等瑞宝章が授与された。

晩年の師は、剣道指導の合間に、門弟などをつかまえて、あまり上手とは言えない囲碁・将棋の二刀流を演じていた。その時の師の姿は、まるで子供のように楽しそうにはしゃいでいた。これは、往年の師が、そのカイゼルひげのゆえをもつて、『ひげピン』と恐れられていた姿を脱し、無我・無欲の境地にさしかかっていた象徴であったように思われる。

昭和五十三年十月十六日、八十六歳でこの世を去った。十月二十一日、師の逝去を悼み徳島県剣道連盟葬が挙行された。五百余名に及ぶ参列者の数が、師の偉大さを物語っていたと言えよう。その遺影は今も県武道館の正面で、我々後継者の活躍を見守っている。（「徳島剣道三十年の歩み」より）

徳島支部長の森川先生より、「孫の稔之先生の手で、範士八段・高島永吉先生について書いて欲しい。」と言う依頼があり、筆を執ることになった。しかし、自分の祖父のこととなると大変書きづらい。とりわけ、私自身が物心着く以前の祖父の姿については、人の話を聞いて書く以外に手に終えないことになる。そこで、往年の姿と経歴については、「徳島剣道三十年の歩み」の中から引用して、その紹介に代えることにした。そして、私自身が物心着いてから後の祖父の姿を通して、剣道家としてその根底にもついていたと感じられる剣道観について述べてみたい。

「高島は、お祖父さんから色々教えてもらえるけんえーなあー。」と、これまで何十人に言われたかわからない。しかし、本当に、祖父を知る人は、「高島は、お祖父さんにも誰にも全然教えてもらえなくて大変だなあー。」と言わずである。（しかし、現実には、誰も、こう言わなかったが……）

祖父から、手取り足取り教わったという人はいないのではないかと思う。それは、口べたで控え目な性格によるところが人であるが、それとともに、

「剣道は、口で説いたり、手取り足取りして教えることのできるものではない。（表面的、技術的なものは教えられるが）」と言う考えが、晩年になるほど強まっていったように思われる。このことは、「現代剣道百家箴」（全剣連、昭和四十七年刊）の中で、「剣道は何のために」と題して述べている内容からも推察できる。この文章は、「徳島剣道三十年の歩み」の中にも紹介されているが、簡潔に言えば、「剣術でなく、剣道であれ。剣道修業の目的自体も、刻々と高まるものであれ。つまづけば、基本にもどれ。時として、師に問いかけて見るもよし。しかし、道の追究は、師の後ろ姿を見て、自身が修業する以外に最終の方法はない。」と言うことだと思われる。

この文章を見る度に、今は亡き下村富夫先生を思い出す。

祖父が、この世を去る二年程前のことである。新年の寒稽古の後、下村先生が、祖父に「お年玉をください。（今日の私の稽古についてご指導ください。）」と言ったところ、「そんなものはない。（下村先生のような段位になると、人から与えてもらえるようなものはない。）」という返事がかえってきたと、私に二、三度話されたことがある。そして、下村先生ご自身は、亡くなる一年程前から、「仕太刀の剣の修業」ということをしきりに口にされていた。あの鋭い剣先からの豪快な技をふまえた「仕太刀の剣」への変容に、道を志す一人として、大きな関心を寄せていた。ところが、思いもよらぬご他界によって、このすばらしい剣道のドラマは、完成を見ないまま終わってしまった。「百家箴」の中の祖父の言葉は、下村先生の話とオーバラップして、今も私の心の中に強烈な印象として甦ってくる。

剣道を志す諸先生方から、祖父と係わるいろんな話を聞くにつけ、「人に『教える』ことは得意としない範士」であったが、「人に『学びとりたい』と感じさせる範士」であったと感じるようになった。私は、職業柄、「教える」ことを業としている。しかし、「人に『学びとりたい』と感じさせる」ことがありたい。」と思う昨今である。

（高島稔之記）

〈阿南支部〉

山本忠蔵先生



阿南支部は、昭和二十五年三月十二日那賀支部として発足しましたが、町村統合合併により阿南市が昭和三十三年五月に誕生して旧那賀郡は平担郡で那賀川町と羽ノ浦町の二カ町となったので、昭和三十四年四月一日より阿南支部と改称することとなりました。

二代阿南支部長山本忠蔵先生は、昭和三十三年より昭和三十四年と二カ年間支部発展に御活躍を頂きました。

明治二十八年十一月一日、羽ノ浦町高田に生まれる。幼少の頃より剣道が好きであった。終戦まで旧制徳島高等学校（現徳大王学部）生徒主事補で勤め、その間昭和十三年召集、昭和二十年まで中国大陸の戦線にあり陸軍中尉で復員、戦後山本製材所を設立して幅広い経営を持つたわら青少年の剣道の指導に当たって来ました。昭和二年剣道初段、昭和十年には練士四



段に、昭和十三年に五段、昭和二十八年教士、昭和三十四年七段、又居合道も教士七段を受領しています。銃剣道教士五段も贈られています。

その後昭和五十二年三月二十七日、行年八十二歳で逝去されましたが支部発展に大きく貢献されました。昭和五十三年五月八日、生前の功績をみとめられて全日本剣道連盟より範士に任ぜられました。今も山本先生の美徳は師弟の仲で伝えられています。

(文責 阿南支部長 遠藤一美)

〈丹生谷支部〉

藤本 幾久



先生は、明治四十一年、相生町朴野に生まれました。元丹生谷第三代支部長。剣道六段教士、居合道五段。神職の家系を継いで只今八十二歳を閲歴される。県下希有の「名誉宮司」である。「朴花」と号し句、歌を為す。

大正十五年、県立富中、現富岡西高卒業。

在校中剣道部に籍を置き、教士山内熊一、大畑兼三郎両先生の薫陶を享け、一級を蒙る。帰郷後、昭和五十七年までの略昭和全期に亘って防具を著けられた丹生谷地方屈指の先達である。

天性純真、举措正中、剣豪のイメージにはいささかそぐわれない人品だが生涯斯道の啓発に果たされた功績は重厚であって、微動だにしない。

遡上する昭和当初、先生は生地朴野に「竜虎館」を設立し、郷土の青年教名に剣道を教授した。一隅の出来事ではあったが実に近代剣道の幕明けであり、丹生谷地方に於ける斯道の曙でもあった訳である。昭和五年、村の青年団に剣道部が誕生、派的に丹生谷青年連合会体育会にこれが採り入れられたが、これらは当時青年会長職に在った先生と決して無縁ではなかったろう。昭和六年、村の剣道熱に呼応して小学校に鬼才岡久幸男先生が新任、日野

谷剣道の黄金時代が現出するわけだが、昭和八年岡久先生三段、藤本先生初段。段位取得の難易度は今に比すべくもなかったか。当時猛鍛錬した連中に西浦新六段、教士新田茂理雄、西村武夫教士らが現存するがこれらの主軸に藤本先生が在ったことは論を俟たない。

閑話 休題

戦後の中断を経て昭和二十五年、日野谷中学では県下の先陣を切って剣道部を創設、藤本先生を軸に在郷剣士が束になって錬成に加わった。県優勝二回の戦績は尠くも伝統の開花であった。

続いて昭和三十九年、日野谷小学校に派及、竜虎館名と俱先生の子弟訓育も亦生氣を帯びて復活する。「やさしい先生」として子供たちの敬慕をうけ、幾多の俊秀を輩出した。

昭和五十七年、長期館長を勇退、防具を納めて今、自適の境涯に在る。昭和期地方剣道の重鎮を体現された先生の更なる長命を念じて熄まない。

(文責 青玄 西田武生)

〈美馬西支部〉

佐伯昇平(一八四八一—一九一九)美馬郡半田町字逢坂の在、心形刀流、関口流の師範(七段)で門弟多数いた。半田における最大級の師範であった。大日本武徳会、徳島支部常議員となる。その長男大幸も家門の師範代をつとめた。昇平七十二歳没、明治初期の剣術家として次の資料が残っている。徳島県阿波国市郷老般擊劍英名録。(明治十六年調製の番付)右の表に半田出身者の名が次のとおり出ている。

(東方) 前頭 一段目 半田村 佐伯 昇平

四段目 半田村 平尾 虎藏

(西方) 前頭 一段目 半田口 逢坂忠次郎

二段目 半田口 川上虎三郎

四段目 半田口 柏尾 常吉

行司 半田村 杉山 安助

佐伯大幸（一八七五—一九三二）明治八年八月昇平の長男として生まれる。大正七年四月半田町助役に就任、昭和五年病気の為退職するまで三期間町行政につくした。日露戦争に従軍し勲六等功七級を授与される。父昇平につき剣道の練達者であり父の師範代として後輩の育成につとめた。昭和七年四月、五十八歳没。

井上半平（一八八三—一九五九）美馬郡半田町字東久保の在、大日本武徳会四段で明治末から大正、昭和戦中にかけて活躍した。戦時中は半田青年学校の剣道教師として長くつとめた。七十七歳没。

（資料提供者、徳島市城南町三丁目六—四六番地）
金沢治氏 TEL 〇八八六一五三一五三二一

〈三好支部〉

国 金 唯 義

剣豪とは、文武両道に優れた人、剣道の達人であり、又文筆に優れた人を指すとすれば、私は、国金唯義先生を第一人者と言っても過言でないと思う。

先生は、香川県大川郡白鳥町に生まれ、同町五名小学校に通い、十五歳の時、初めて竹刀を握り剣道の道に入り、三野国太郎先生の教えをうけた。

小学校を卒業する時、小学校の先生になろうと志し、香川県立師範学校一部に見事合格し、入学した。

在学中、剣道は勿論、小学校訓導としての勉学に励みつつ、通信教育により書道を学び大いに努力した。

卒業後は、香川県内の小学校訓導として、児童、生徒に教鞭をとった。

剣道にあつては、自ら向上を願ひ、武徳専門学校出身の植田平太郎先生（当時四天王の一人と呼ばれた人）の門を叩いたが自分の力の小なるを悟る、平太郎先生の息子・植田一範士と若い時、雌雄を決するまでに上達し、教士、七段、最高の高段者となった。

書道にあつては、藤原鶴末先生を師として益々勉学に励み、豪快な筆跡を修得し、文部省検定に合格した。

家庭の都合により、徳島県内に移住することとなり、箆藏小学校に転勤、子弟の教育に努めた。続いて、県立池田高等学校に、又最後に山城中学校の校長として、最高の地位を収めた。

昭和四十九年春、三十九年間の教員生活を無事全うし、停年退職した。退職後は、私費を投じて、近くに剣道場を建設、近郷の子弟に又、三好郡内の剣道愛好家の指導に専念すると共に、同道場において書道の指導にも励んだ。

その功績は著しく、有段者・高段者が続出することとなった。書道にあつては、自ら徹翠と号し、郡内、公民館の子弟に指導し、武道館に大書した筆跡を見ることが出来る。

以上、私が先生を見、又聞きおぼえた一端を述べ、皆様のご参考になればと思います。

（橋本清匡記）

〈名西支部〉

剣道、居合道範士 須見善富先生



幼少の頃より剣道家を志し日夜修練、大正五年一月には久保利雄先生より剣道神影流の免許を伝授され其の後阿波における柳生神陰流の継承者となる。大正十年県支部助教授、大正十三年県立德島中学校嘱託となり翌年脇町中学校教諭となり青少年剣道教育に専念する。大正十四年剣道錬士、昭和

十一年剣道教士、昭和十四年県支部教授剣道六段、昭和十五年無双直伝英信流山内豊健先生に入門する。昭和十六年県支部剣道教授として功績により表

彰される。昭和十七年県支部参与、居合道錬士、昭和二十一年叙従七位、同年三月県立脇町中学校退職、昭和二十四年十月県剣道連盟発足するや顧問となる。同年自宅に雄心館道場開設し有志諸志と新剣道居合道の振興に努力する。昭和三十年県剣道連盟副会長（会長県知事）及び全日本剣道連盟評議員理事、昭和三十一年居合道教士七段、昭和三十七年五月全日本剣道連盟十周年記念に表彰状及び記念品拝受、昭和三十八年剣道八段、昭和四十二年四月二十九日徳島県文化功労章受章の榮に浴する。昭和四十三年剣道範士、居合道範士、昭和四十三年三月五日九州湯布院にて死去。従六位勲五等瑞宝章、法命宝樹院殿釋雄心大居士、昭和五十二年十一月十三日徳島県立脇町高等学校に顕彰碑建立される。碑文次の通り。

須見善富先生は明治二十六年名西郡石井町西覚円に生まる。若くして柳生神影流久保利雄先生の門に入り免許皆伝を受く。更に全日本剣道連盟より剣道八段範士を允許さる。大正十二年徳島県立脇町中学校剣道師範となるや質実剛健の脇中魂の涵養に尽瘁され、脇中剣道部の基礎を確立し県下に覇を称える黄金時代をつくられる。在職実に二十有三年、教えを受けし俊秀三千余に及び。昭和四十三年病を得て忽然として逝かる。時に七十四、歳先生の徳を慕う者は剣道を学びし者のみならず県下各界各層にわたる。雄心須見善富先生の厳しさの中に慈愛溢れる教導を受けし門弟相寄り相計り母校八十周年の盛期に当たり碑を建立し先生の徳を永久に称えんとする。

尚著書に無双直伝長谷川英信流がある。嗣子光昭は医師で、内科を開業、その子昌輝も徳島大学医学部大学院卒業、医学博士で三木康栄賞受賞。現在父と内科循環器科を共に開業、剣道三段であり日々修業中である。

〈阿波支部〉

相心流第十三世井上恰と

後見人古谷常太

阿波郡市場町切幡四国霊場第十番札所切幡寺本堂の左側石段を登ると山を背にして高く聳える美しい二重の塔は眼下に市場町、善入寺島、吉野川、麻

植郡の町々を遠く見渡せる風光明媚な場所（写真一）に建てられている。この塔はもと大阪住吉大社の別当神宮寺にあったのを明治五年より十年の歳月をかけて移転工事を行い明治十五年に完成した由緒ある建造物で国の重要文化財になっている。

この塔の一層屋根の軒の正面観音開の唐様式の棧唐子の上に大絵馬（写真二）の武道額が掲げられている。武道額は剣の上達を祈願したり、試合に勝ったさいの記念、あるいは自流の強さを誇示して奉納するものである。然しこの武道額についての伝承も文献もなくその上相当年月が経っているので墨書の文字は消え只々風化して消え去ろうとしているのは誠に惜しい極みである。読める文字により判読すれば、明治十八年乙酉一月吉祥日相心流第十三世井上恰門人三木田寿平以下六百余人列記し後見人古谷常太に依り奉納されたことが知れる。

相心流とは上洲桂萱郷上泉（現前橋市上泉）に生まれた上泉伊勢守英綱（永正五（一五〇九）年生）が諸国修行中、日南の鶴戸神社（宮崎県日南市）に参籠して靈夢を蒙り開眼して出来た流派で当初は雙神流と称していたが天和頃（一六八一年）「神」の字を恐れて相心流と改めたと伝書に書かれている。

阿波には山城の住人木村郷右衛門頼重が蜂須賀藩の師範となり藩中に教えた。木村頼重より川端頼政が受け川端家が相心流の宗家となり頼政一義頼一正頼と伝えられたが川端家より井上家に養子に來て以来井上家が宗家となり、十一代頼安一十二代頼愛一十三代恰一十四代頼正一十五代頼英と伝えられた。井上家は平家重盛の子維盛より出る。平家滅亡後織田家に仕えるが本能寺の変後阿波に來り美馬郡脇城城主武田上野守の与力となる。

適々土佐長曾我部元親の進攻（一五八二年）に合い、上野守は破れたので逃れて美馬郡穴吹に移住する。蜂須賀入国後「召抱え」の誘いが有ったが固く辞して居を穴吹より麻植郡中島に転住する。

恰は（写真三）天保一年（一八三〇年）生まれ、父頼愛に手解きを受け修行する。長ずると益々技量進み相心流十三代宗家を嗣ぐ。人徳も有り門人四集し道場は隆盛を極めた。この時自宅に五間に十間の道場を建てた。この道場は大正七年までであった。

武功院心徹義剛居士

後見人古谷常太

古谷常太は麻植郡川島町神后（まき）の住。

古谷家は阿波の守護細川詮春より出た豪族で代々川島で住居していた。蜂須賀入国後（一五八五年）家老稲田植元（いね）の給地が川島にあったので稲田の家臣となる。常太は文化十三年（一八一六年）五月十八日川島の桑村古谷常介（くま）の長男に生まれ性温良剛正で幼少より武を嗜み相心流第十一世儀之丞頼安より剣柔槍棒砲術を学び第十二世豊三郎頼愛より印可を許される。後益々修鍊して筆頭門人となり相心流の後見人となる。相心流井上道場の最も栄えたのは十三世恰・十四世頼正・時代でこれは後見人常太の盡力に依るものと言われている。

宗流院常圓義徹居上（写真五）明治三十四年十月九日八十七歳死。尚常太には善太郎という末弟があった。彼は幼少より剣を好み兄同様相心流の達人で切幡寺の麓、観音池の畔で生活してこの地方の多くの門弟を教えていた。恰は明治十七年十一月十四日死去したので善太郎の世話に依り古谷常太と門人により翌十八年一月早々吉日にこの大絵馬の武道額を奉納し大塔前広場に六百余人の門弟集まり演武を行い慰霊追悼大法要を為し自流の発展と門人の益々精進を祈願したのである。

丁度この額を奉納して現在百余年になる。この大塔より一眺出来る阿波・麻植地区の若者の高校生が六十三年度第三十五回高校総体剣道大会、第四十三回国民体育大会剣道大会に本県代表選手として多数参加して活躍したことは恰、門人六百余人、後見人古谷常太、等の悲願の一端を成就したのではなからうか。

（坂本裕二記）

（写真一）



大塔より麻植、阿波を眺む

—風景絶佳—

一眺出来るこの地区から六十三年度県代表選手として高校生が活躍した。

「第三十六回全国高校剣道大会」

山田 真也 川 高 市場

長井 薫 " " "

吉田 一之 " " 阿波

十川 千吾 " " "

北村 仁志 " " 鴨 島

楠 正代 富岡東 市場

近藤加奈子 " " "

「第四十三回国民体育剣道大会」

松永 貴史 富岡東 市場

香川 利浩 " " 市場

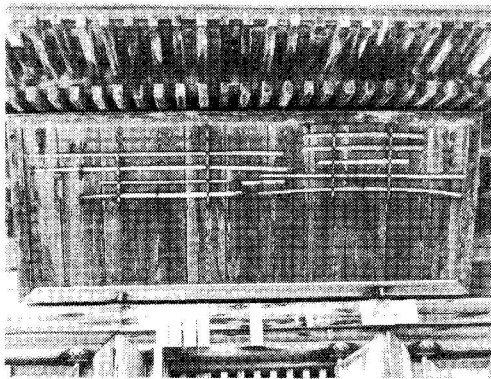
長井 薫 川 高 市場

北村 仁志 " " 鴨 島

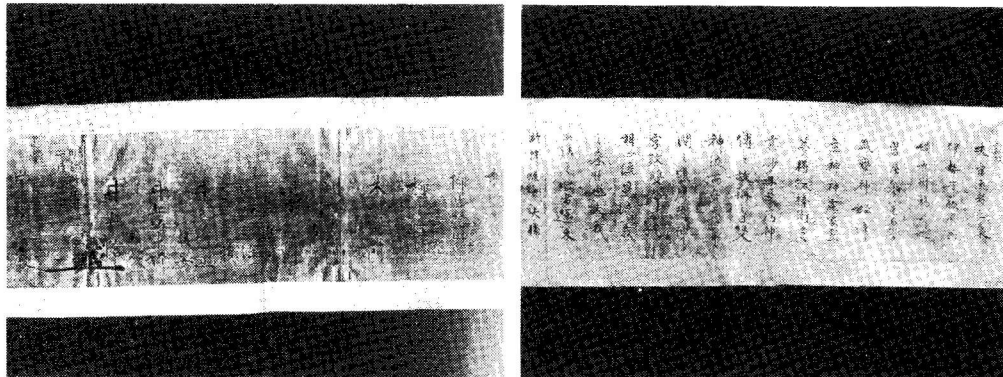
一・六m×三・六mの大絵馬

徳島県では最大の武道額であろうか相心流第十三世井上恰の麻植阿波の門人六百余名の人名が列記されている。

（写真二）



(写真三)



井上恰が明治十五年に片山政太郎
に与えた目録免状

一飛無敵

夫れ当流は上泉伊勢守藤原英綱が
九州鶴戸の岩屋に参籠して

武甕神経津主神に誓い

神慮を蒙り靈夢によつて

劍・棒術之奥妙を得

正に是れ神伝之故に

之を称して雙神流と曰う而して后

天和年間之頃應に神の字を恐れて

雙神を改めて而して相心流と号す

是れ流流義之来歴也 以下略

- 柳生対馬守 宗在
- 柳生備前守 俊方
- 木村郷右衛門 頼重
- 川端磯右衛門 頼政
- 川端権左衛門 義頼
- 川端 延治 正頼
- 井上儀之正 頼安
- 井上韜中齋 頼愛
- 井上 恰 頼音

明治十五年二月二十日

片山政太郎殿

(写真四)



門弟一同が建てた恰の墓
場所 麻植郡鴨島町中島
旧井上恰居敷
武功院心徹義剛居士
明治十七年十一月十日死
五三歳

(写真五)



門弟一同が建てた
古谷常太墓
場所
麻植郡川島町国道一九二
号線
川島警察署東一五〇米北
側墓地
慈光院真操智鐘大姉
(恰の前妻)
宗流院常圓義徹居士
明治三十四年十月九日死
八七歳
慈観院妙諦智春大姉
(後妻)

人物紹介（各支部より）

〈徳島支部〉

竹原 常雄

（剣道範士七段・県剣道連盟顧問・
親道館館長）

先生は、明治三十六年七月十三日、徳島市西二軒屋町に生まれる。八十六歳の現在も、週二回の親道館の練習日には、欠かさず竹刀をとって少年・一般剣士に稽古をつけておられる。次々と掛かる高段者相手に、驚く程軽い身のさばき、適切な間合、相手の技を引き出す絶好の機会……長年の厳しい修練の成果である。

先生は、十五才の頃、当時の徳島県警察剣道師範越川秀之介先生の練習試合を見学、剣道に強い興味を抱き、直ちに越川先生門下の浜谷晋先生に師事する。徳島市が第二次大戦の空襲で焼失するまでの約二十七年間、浜谷道場で修練され、後には師範代をつとめる。またその間、昭和十二年から昭和二十年まで、師と仰ぎ、良き先輩としても親交のあった高島永吉先生の推薦で県立徳島中学校（現城南高）の剣道教師を勤める。後半には、勉学重視の学校方針のため、一時不振に陥った徳中剣道部を、持前の積極性と熱意で、再び県下大会での優勝に導いたこともある。昭和二十年に日本敗戦のため禁止された剣道も、四年間の空白の後、昭和二十四年に復活。しかし、市内は焼野が原から徐々に復興の途中であり、練習場のないことが剣道愛好家達の悩みの種であった。剣士としての先生は、自家の営業用倉庫（青果卸業）を開放、待ちわびていた同好の士二十名程で練習を開始する。その当時、本格的剣道の活動は四国でも珍しいものであったと聞く。毎日毎日、昼は営業、夜はその荷物を片付けて……と大きな労苦があったものの、この竹原道場を訪れる剣士は数多く、二年後には、戦後郷里の岡山に帰国されていた高島永吉先生を再び徳島にお迎えし、益々隆昌に発展する。昭和三十七年親道館と改

名、その後、倉庫も専用道場に改築、現在に至る。お世話になった剣道家・弟子の数は優に五百名をこえる。親道館の発展を側面から支え、現在もその中心的存在として、後進の指導に当たっておられる勝浦守・山田新六郎・熊本淳一・西野四郎・稲木紀一各先生は、当初からの門下生である。

昭和二十四年、徳島県剣道連盟副会長に就任。その後、理事長、審議委員長、名誉会長と重要な役職を歴任され、日夜、剣道の育成と充実に心を砕かれた。現在は顧問として、高所より剣道を見守っておられる。

戦後、徳島県剣道界の復興と発展の基盤となり、原動力となられた先生のご功績は極めて大きいものである。

先生は、非常に温厚なお人柄ですが、人生や剣道について語られる時、静かな柔らかな話しぶりながら、経験と信念に基づいたその内容は、味があり迫力があり、圧倒される。一社会人として、家業を営み、一歩一歩堅実に歩まれた人生を振り返り……「剣道をしていて良かったと思うことが多い。」「現在の私、心も健康も剣道のおかげです。」「剣道は、厳しさとやさしさが必要ならぬ。商売も同じこと。……と。社会生活と剣道との結びつき的重要性を強調される。先生ご自身、「礼儀」を殊の外大切にされる。たとえ門下生に対しても、その姿勢は変わらない。それだけにその指導も厳しく、少年達にも、分かり易く事細かに教えられる。……「剣道は礼に始まって礼に終わる」……その心の実践である。また、人一倍、弟子を大切にされ、思いやり深く、人に応じての行き届いた、忍耐づよい指導は、門下生ひとしく敬慕の念を抱くところである。「剣道即生活・生活即剣道」……才能よりも努力を高く評価し、人間性の向上を指導の信条とされている。

先生は今日も道場で竹刀を持たれる。八十六歳の今も、いつまでもご壮健でご指導頂けることを心から願っております。

（文責 森川澄）

〈板野東支部〉

中谷 智好 (77歳・教士・六段)

出身地 三好郡池田町西山

生年月日 明治四十三年十一月三十日

没年月日 昭和六十三年 七月 八日

大正十二年、十四歳のとき池田町より徳島市富田浜、徳島魚市場株式会社に入社。

昭和五年、魚市場社長、吉本彦吉先生の指導のもとに剣道を始められました。

昭和十一年初段、十二年二段、十三年三段と毎年昇段なされました。板野郡北島町高房で鮮魚店として独立開店し、昭和十六年三月、日本油脂徳島工場(現東邦レーヨン)会社内、青年学校剣道教授嘱託を受け学校と地域剣道の発展に尽力され、昭和四十四年七月私設道場誠武館を開設、地域少年の非行防止、健全育成に努められました。昨年迄に三百人からの入門者を数えこの間、店と指導に努力された為、昇段審査の機会を失い、昭和二十八年五段から約三十年後、昭和五十七年に称号教士、六段位を受けられました。

昭和十八年九月 徳島県剣道連盟・産業報国会、共催県下大会個人優勝

昭和四十六年十一月 徳島剣道連盟より表彰

昭和六十二年 一月 徳島県体育協会功労者表彰

人に接する時は、おだやかで特に子供には笑顔で指導され、「剣は人なり」と申しますか、立ち向かう姿はおだやかで自然体そのもの、しかし打ち出す剣先は鋭く、身は水の上を滑る如く、基本どおりの動作をいつも見せていた。少しくも近づく事をモットーにご指導を受けてきました。健康な先生に昨年六月十二日、予期せぬ突然の病魔に襲われ、七月八日、悲しい訃報を受けけるに至りました。

門下生一同先生のご意志を受け継ぎ、これからの人生(剣道)の糧とします。

(大野義則記)

〈丹生谷支部〉

雄西 義春 (62歳・六段・農業)

木頭村和無田に生れ、昭和二十五年結婚、二男一女の父である。幼少の処、友達とチャンバラをして怪我をする事、たびたび、十五年大和塾道場・大沢善二郎先生の門下生として、稽古に励み修業を積む。二十年終戦休む。二十七年再度同志と剣道を始める。二十九年二段合格、村にも数名の有段者が生まれる。剣道熱が高まり同志と率先して、専用道場建設にとりくみ、三十二年早々よろこびの大和錬心館誕生、大沢先生の指導を受け、稽古日には必ず出席する熱心さ、五十二年六段に合格。自分の稽古は勿論、後輩の指導に専念する。誠実温厚で人望も厚く、木頭村の剣道発展に大なる貢献、最近身体の調子が悪く療養につとめている。生涯剣道を忘れない彼。一日も早く元気になって稽古の出来る日を祈る。(松本記)

河野 有 (60歳・五段・司法書士)

昭和五十一年五月 宮浜少年剣道教室を設立

昭和五十五年十月 同教室が剣道部門初の藍青賞を受く

そして現在同教室出身者が宮浜中学校を経て県南各高等学校で中心選手として活躍中である。教室での直接指導はもとより、同教室の事務担当者として、指導者陣の編成、出席要請、室生減少傾向の教室の維持存続に苦慮されて十余年、その功績たるや誠に以て大なるものがある。社会的にも五十二年の上那賀町体協会長より、五十五年の上那賀町教育委員長表彰となつて顕彰されている。

氏の剣歴も小学校四年から竹刀を握り郡県大会での優勝、栗島商船学校での県大会個人優勝等数多くの足跡を残している。因に支部内でも上那賀支所の事務局長格として丹生谷剣道向上発展に寧日なき努力あることをつけ加えて擲筆する。

(文責 山脇)

〈阿波支部〉

藤井 利一 (36歳・五段・県農協経済運動)

阿波中学校時代剣道を始め卒業後、脇町高校に進学し、当時の剣道教師故滝下七段の指導を受け技能を磨き選手として県高校大会で活躍した。その後松山商科大学に進み更に修練を重ねて大学対抗戦に於ても活躍、彼の旺盛なる気力と俊敏なる小手技は大会においても注目を浴びていた。卒業後も剣道の修練を怠らず昭和六十年九月五段に昇段、現在勤務の傍ら阿波少年剣道教室の指導員として健全な青少年の育成に努力を重ねている。

彼こそ今後の阿波支部の中核として郡剣道の発展向上のため大いに寄与されることであろう。

〈三好支部〉

合田 秀實 (五段・山城剣道修練クラブ)

池田高校に入学すると共に剣道部に入る。国金唯義先生の指導のもと熱心に練習に励む。卒業後法政大学に入学東京都中野の興武館に入門し、小沢兵先生や多くの高段者の方々に学び、剣道の奥の深さや楽しさを実感する。帰郷後山城町役場に勤務、県連三好支部会員として剣道を続ける。昭和五十四年頃から仕事の都合や家庭の事情で約八年間のブランクがあったが、昨年一月より山城剣道修練クラブで子供の指導をする様になり、再び古い古を始め。現在夫人子供2人と共に家族全員で剣道を楽しんで居ります。

山下 敏雄 (三段・川崎スポーツ少年団剣道クラブ)

中学校1年生より剣道を始め、高校在学中二段に昇段、卒業後仕事の都合上7・8年の間剣道が出来にくくなり休んで居りましたが、昭和五十七年より地元の川崎小学校スポーツ少年団剣道クラブが発足致しました。それを機会に剣道修練に復帰し、阿波池田農業協同組合に勤務しつつ平田照男先生のもと地域青少年の健全育成の為に堂々とした体格と、いつも笑顔を見せて、小中学生の指導にあたって居ります。

〈美馬西支部〉

大川 功 (二段・地方公務員)

昭和四十七年県立三好農林高等学校を卒業、昭和五十二年より半田町役場に奉職現在に至る。昭和五十九年より父の所属する剣道教室に子供二人が通い始める。子供を連れて剣道教室に出入りする内に自分自身も剣道の魅力に取り付かれると共に健康管理の為に三十二歳より剣道の習練を始める。以後寸暇をおしんで、自宅でも素振等をするなど稽古に励んだ結果、昭和六十三年九月、二段に合格、現在も父と各先生方に稽古を付けてもらいつつ子供達の上達を願って頑張っ居ります。

最後になりましたが私の所属する教室は、半田町子供剣道教室です。

笹尾 民夫 (42歳・二段・会社員)

美馬町剣道教室に、長男とともに入門して三年になります。子供の心身の健康を願うのですが、その目的は十分達せられていると思われ、御指導の先生方に感謝しております。親子でしたほうが長続きするだろうというぐらいの気持ちで始めた私自身、現在では剣道の魅力に取り付かれてい

ます。

剣先の一点に気力を集中させて相手と対した時の緊迫感。その緊張の一瞬が日常の生活では経験できない貴重な時間と思われます。技術ではまだまだ初心ですし体力は衰えを感じる年齢ですが、気力をもって基本に忠実に若々しい剣道を続けていきたいと思ひます。

〈板野東支部〉

土佐 佳史 (24歳・初段・松茂農業協同組合勤務)

松茂少年剣道教室で小学三年生から剣道を始める。中学、高校一年生頃まで剣道を続けていたが、その後大学へ進み剣道から遠ざかっていた。大学を卒業後、松茂町内に勤務することとなり、子供のころ少年剣道教室で指導を受けたこと、また一緒に稽古した友達のことや楽しかったことなどの思い出が今も残っている。これからも剣道を続け、地元の人達と一緒に頑張りたいということで剣道教室の世話役をかって出てくれました。

剣道教室でワンパクであった子供達が、今は大きく成長して一人前の社会人となり、剣道を通じて松茂町の後継者を育てるようになりました。「万町の田を耕すも、その技は一鍬ずつの功による」今後も努力を積み重ねこの輪を広げなければならない。

(文責 原田)

〈勝浦支部〉

立岩 勝己 (52歳・四段)

勝浦少年少女剣道教室が、開設せられて7年と言う年月を数えます。開設以来、豆剣士の一週間に2回の練習日に、一回も欠かさず、大変熱心な、御

指導をされております。

耐えず、礼儀作法は、元よりですが、剣道の基本と言う事を忠実に、教え込み、守らせた練習風景は、父兄の方々にも、賛同を得て、依って協力も得ながら、自らも、技術、その他を実践しています。全く疲労を感じさせない、練習振りは、他の若い指導者を、圧倒するものがあります。

剣道歴、三十余年で、現在、勝浦支部長さんでもあります。
今後共、若々しい剣道の指導を、尚一層、期待したいものです。

中根 幸治 (39歳・初段・会社員)

熱心に剣道の稽古を、積む人が、ここに居る。彼は、一介の会社員である。彼が、剣道をする様になった切っ掛けは、昭和六十三年五月に、少年剣道教室の、募集をした時の事である。彼は、当初女兒に、剣道を習わすつもりであったようだが、子供はせずに、彼自身が、健康管理の為に始めたのである。三十九歳にて、初段にと挑戦、見事合格、今や、週二回の練習日には、かかさず出ると言う熱心さである。まだまだ、剣道においては、未熟ではあるが、目下、二段を目指して、頑張つて居ります。

〈小松島支部〉

松田 敏弘 (三段)

私が剣道を始めたのは、長男が小学校の剣道部に入部して間もなくの頃でした。

私は、中学校時代、一年余り竹刀を握つて、剣道の真似事をした事がありますが、私の習った剣道と、今のやり方では、かなり違っている様に見え、これは、又、ひとつ最初からやり直してみるかという、軽い気持ちから始めたのです。

当時、私は40歳で、年齢的にも、体力的にも、かなり不利ではありましたが、幸い良き師に恵まれ、ここまで、剣道に熱中してきております。

私は、今まで、農業の分野の人達との付き合いがほとんどでしたが、剣道を通じて、他のいろいろな職業のすばらしい人格者達、また、優秀な武道家の先生方と出会う事ができて、私の人生にとって、大変貴重な勉強と経験をさせて頂いています。

子供達の指導をしてみても、思う事ですが、大半の子供にとって、剣道は、あまり興味のあるスポーツではないようです。親の方が、ある期待をもって、子供に剣道を強いているらしく、子供は、学校の授業と同様、仕方なくしているというのが実情であろうと思われます。

私は、もう少し、子供達が面白く、剣道を学べないものかという事を、いつも念頭に置いて、いろいろ愚考しながら指導しております。

指導者の条件とは、まず、指導者が、心から剣道が好きである事、また、現在も、熱心に剣道にチャレンジしている事だと思えます。

私は、素手の格闘技の経験者ですから、剣道も格闘技の一つであると考えています。しかし、子供達に対しては、大人の剣道に対する考えを直接言わずに、先人達の残してくれた技を楽しむスポーツそのものであるという考えで接しています。

對抗試合等を通じて、子供達と、勝ち負けにこだわり、一緒に遊び、その「遊び」の中で、剣道に興味を持たせ、できれば、中学・高校と続けられるようにし、その過程において、少しずつ、古来からの剣道というものを理解してもらえる様にと考えております。

先生方が言われる通り、剣道とは、一生続けてこそ意味あるものと考えていますので、先生方及び剣友の皆さん、どうかこれからもよろしく御指導下さいませようお願い申し上げます。

〈名西支部〉

高瀬 善繁 (四十三歳 四段)

熱心な剣の修業を積む名西剣士の群像の一人。彼は剣歴十四年を迎え、平成元年の第一回審査で五段合格を目指している真摯な剣士であり、高浦少年剣道クラブの良き指導者であります。家庭においては、一男(中3)、一女(小5)の良き父親であり、外では医療機関に医薬品を納める営業マンとして活躍している四十三歳の熟年の星であります。

泊 利治 (四十七歳 二段 県議会事務局)

温厚篤実、自分を表に出さない、それでいて一本筋金の通った処のある、気骨ある剣士。

彼は若い時代にはジョギングを楽しみ十数年続けられ、その間に詩吟も愛好し、スポーツ面ではソフトボールチームの柱としてがんばっていましたが、或る日名西支部の剣道の先生方と親しく懇談の機会があり、その先生方の気概に感ずる処あつて歳四十五にして初めて竹刀を手にしたのであります。

稽古には寸暇を惜しんで参加し支部の稽古日は勿論、徳島右武館での少年達との熱心な稽古ぶりは模範的で持ち前の根性と粘りで来る五月の審査には三段を目標に意欲を燃やしています。

剣道随想

宮本武藏考(二)

直心館館長小松島支部長 田村直一

(あゝ 巖流島)

「わしが心と巖流島は

ほかに木はない松ばかり」

と、豊前民謡に謳われているように巖流島は実生の小松などが雑生していたといわれているが、筆者がこの地を訪ねた十年前には、松は殆ど松喰虫に喰害され、篠竹・女竹・薄・落などが生い茂り荒れた野原であった。

巖流島という名称は慶長以後、武藏と巖流の試合が喧伝されてから後のものでその以前は舟島といわれ、明治四十三年と大正十五年の二度にわたる埋立ての結果面積は往時の約五倍になったといわれるが、島内を一周するのに十分はかからなかった。東側に小丘があり西端に無人灯台、中央に廃寺があり大きな池の跡が雑草の間にかくれてあった。

船頭の案内によると、二人の相対した浜は東南角の辺で当時は砂浜があったらしいが今は浜は小さく汚れていた。

「佐々木巖流之碑」明治四十三年十月三十一日

(舟島開作工事之際建立)

この碑は小丘の東の方向、竹藪の中にあつて下関海峡に向かって建てられていた。島が近代的開発にむけて注目されてきた日露戦役のあとに関係者によって建立されたらしく「四尺八寸(一・五米)の棹石」である。

舟島は所有者が数多く変転しているが船頭の話では、その当時から二つに区分されているとのことであった。

「わが心いたく悲しみこの島に

命おとしし人をしぞおもふ」

小次郎に同情するあまりに歌人の「斎藤茂吉」はこのような歌をつくっている。茂吉は武藏を専怯者であるとし、武藏が兵法の「智術」を云々するが、いくらなんでも故意に二時間も試合に遅れて敵を、いらいらさせること専怯この上ない。さらに茂吉は言う「一方が剣で闘うなら一方も剣でなければ剣客の勝負としては私は面白くない。断りもなく通知なくして木刀を使ったなども専怯者の所作である」。と……だが「古文によると双方が手にする得物は選ばない『自由』を約束されていた」。

兵法の勝負を今日のスポーツと同次元で論議できないとおもいますが、茂吉は兵法の勝負を今日のスポーツと同次元でとらえて、スポーツ的精神が武藏に欠如していると追求しているところが大変興味がかかる。茂吉の筆法でいけば、試合前に種々の心理戦術を弄した、剣聖「塚原卜伝」などは武藏以上のものがあつたのではないか。この武藏論は逆にいえば小次郎の敗因を暗示している。

「小次郎は何故敗れたのか」

自然科学が進歩すれば人間の「怒る」という感情も、主として化学反応の立場から解きあかされる。さしあたって、怒りが交感神経を興奮させ、骨格を動かす横紋筋の緊張を高めることは広く知られている。剣の勝負においても、はては喧嘩に至るまで怒った方が負ける確率が高い理由になつていく。怒りは肉休の「自然体」だけでなく、心の「自然体」、即ち武藏の「常の心」をも失わせる。まこと「憤怒」ほど勝負にさいして危険な感情はないのである。

武藏は一刻おくれで舟を降りる、「武藏」何故遅れたか」と小次郎は詰問した。遅参するとは「フェアー」でないという意味の反語である。兵法者としてこれは烏滸の間である。小次郎はそんなことを問うた自分をすぐに悔いた。にがい後悔の念は同時に焦燥にかわりその言が武藏に黙殺されるに及んで、さらに怒りと化した。そして抜き放った鞘を水中に捨てた。「小次郎負けた」とすかさず武藏の暗示がかかり、小次郎の憤怒は頂天に達するのである。「五輪書」による「うろめかする」とか「むかつかする」とか「おびやかす」とかいった、かけひきの知恵が勝負の展開にいちいちあてはまるとおも

舟島にある佐々木巖流之碑（決闘の場はここから東南一〇〇米）



この秘太刀があることを昨年現地でも聞き知った。

佐々木小次郎は「燕」が柳の枝に反転してなびく一点を覗視して悟ったという。小次郎は越前宇坂の人（現在福井市一乗谷駅下車南方へ三軒（高田勢源の家人となるも、後に諸国を歴遊高名の兵法者となり、細川忠興の豊前小倉で兵法指南役をつとめる。天資豪宕、壮健類なしと「二天記」にかかれて

いる。武藏が舟島に向かう舟の上で削った木刀は四尺二寸であり、小次郎のは備前長光の三尺二寸の長刀である。小次郎は口中の陽がキラキラと海面に強く反射することを承知して波打ちぎわへと走りより武藏を牽制した。技が互角ならば得物の長短が生死をわける。武藏は巧妙に立ちまわった。小次郎が真っ向から打ちおろす前に、權削りの木刀を背へかくすように構えていた。小次郎の「誤算」は何か、一つは「間合」。二つは武藏の「左利き」によるものであった。

小次郎は反射的に大刀で横に払った。一の大刀で武藏の鉢巻きは真二つに切れて飛び二の大刀で武藏の袴の膝を五寸（一五釵）も切り裂いて即死した。このことは武藏の左手のみの打ちこみによって、正確度だけでなく速さも倍加されたと専門家がいつている。

鈴木健二氏は架空実況中継「巖流島」と題して放談する。巖流島の決闘は、各地にまだ戦国時代の余韻がくすぶっている江戸時代初期の一大イベントショーであった。一般人の見物は禁止されたが、それでも試合当日佐々木小次郎の乗る舟が出帆する小倉の港には見物希望者が「ワンサ」と押しよせた。テレビも新聞も、ましてや、イベントを親切に予告・案内してくれる雑誌もない時代なのにもかかわらず、噂が噂を呼び「巖流島フィーバー」となった。と書く……

私は十年前早春の午後「江ノ浦漁協」に依頼して老船長に案内されて「巖流島」に向かった。僅か六分にして島に上陸。島中を廻り歩きながらこんな話を船長から聞いた。それは小次郎の怨念ばなしであった。「盆の十五日の夜、この島の上空で二つの火の玉がもつれあったのをみたという。またこの島に造船場があってその番小屋にいた守衛の妻女が小屋のまわりで夜な夜な聞こえる姿なき梵音への心労によって狂死したという話を実感をこめて語っ

茂吉はその著書の中で、歌人すべからく「処女性」を失ってはならない、いかに作歌の技巧に手なれてきても常に物事に対して新鮮な感動と驚きを保持しなければならぬ、と即ちそれは「敵我戦う時、もつるゝ心に成りてはかゆかざる時、我気をふり捨てゝ物事を新しく初むる心に思ひて、其の拍子を読んで勝をもてあそぶ所」と同じであるといわれているように、作歌も武藏の説く「何時にても役立つように」稽古することだと教えている。

「吹風も雪もあられも咲く花も
勤むる業の工夫とはなる」

「直心影流」の「教歌」の一つであるが、自然はひとり自然科学者だけでなく人間すべてに、さまざまな創造のヒントをあたえてくれる。

ドンと相手に突き当たった利那、さっと金品をぬいて逃げる掏摸を「燕返」というそうである。佐々木小次郎の秘剣は「燕返」で、香取神道流にも実際

てくれた。巖流島には小次郎の霊が今も成仏できず聲音をたてて島中を毎夜狂奔まがまがしていると低い声でいわれた。

佐々木小次郎は敗けたが幾多の伝承を残して「巖流島」として碑が建立されている。

「小次郎は自ら語らず、人をして語らせる。」

その死地となった「巖流島」が、あたかも小次郎の化身でもあるかのごとく、海峡の風雨にさらされながらむせびないているかのように感じられて、いまも憶いは遠く旅愁深いものがある。

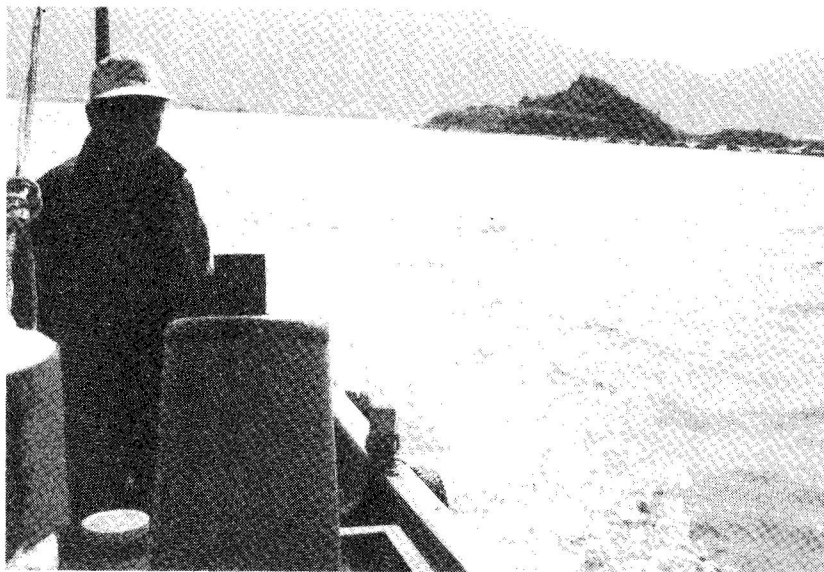
付記

(現在の試合規程で行えば佐々木小次郎が勝っていると筆者は断定する。)

舟島中央部にある寺と池跡



関門海峡を舟島へ船頭と共に



昭和63年度 戦いの跡

〔県内〕

◆第13回会長杯高校剣道大会

(4月17日鳴武)

【男子】

▽1回戦 城北4-1徳島東工、海南3-1新野、阿波4-0日和佐、川島3-1那賀、城ノ内4-0城南

▽2回戦 城北3-1徳島農、脇町4-0生光学園、阿南工2(得点勝ち)2海南、富岡東4-1阿波、川島4-1城東、徳島市立2(得点勝ち)2小松島、富岡西4-1鳴門、徳島工3-2城ノ内

▽準々決勝 脇町3-2城北、富岡東5-0阿南工、川島4-0徳島市立、富岡西4-1徳島工

▽準決勝 富岡東4-1脇町、富岡西3-2川島

▽3位決定戦 川島4-0脇町

▽決勝 富岡東4-1富岡西

○西岡メモーコ近藤

○近藤メモーコ近藤

○西岡メモーコ近藤

○西岡メモーコ近藤

○福井メモー栗田
○香川メモー前田
○鳴川メモー藤田
○小川メモー近藤
○松永メモー福多

【女子】

▽1回戦 城南3-2海南、富岡西4-1徳島商、小松島3-2日和佐、川島5-0城ノ内、富岡東5-0鳴門、城北3-2生光学園、徳島市立3-2城東、脇町4-0新野

▽準々決勝 富岡西3-1城南、川島5-0小松島、富岡東5-0城北、脇町4-1徳島市立

▽準決勝 川島3-1富岡西、富岡東2-1脇町

▽3位決定戦 富岡西4-1脇町

▽決勝 富岡東4-0川島

○近藤メモー芝橋

○西岡メモーコ近藤

○西岡メモーコ近藤

○西岡メモーコ近藤

西 引き分け 工藤
○折上メモー尾上
○楠メモー米倉

◆第40回四国四県剣道大会

(5月22日鳴武)

▽リーグ戦 愛媛9-1高知、徳島5-4香川、香川6-4愛媛、高知4-3徳島、愛媛5-4徳島、香川6-5高知

▽順位 ①愛媛2勝1敗 ②香川2勝1敗 ③徳島1勝2敗 ④高知1勝2敗

1・2位と3・4位は勝者数による。

◆第28回県高校総体剣道競技

(6月4日〜6日徳農体)

第1日目

【男子】

▽1回戦 鳴門5-0鳴商、海南5-0板野、城ノ内5-0日和佐、脇町5-0池田、小松島5-0東工、城北5-0穴喰、市立5-0阿商、川島5-0新野、徳商3-2阿波、城東4-1三好、生光4-1名西、阿工4-1徳農、那賀5-0貞工、徳工3-2城南

▽2回戦 富岡東4-1鳴門、市立4-0城北、川島5-0徳商、生光3-1城東、那賀3-2阿工、富西4-1徳工、海南2

▽3回戦 富岡東4-1脇町、富岡西4-1脇町

▽4回戦 富岡東4-0川島

○近藤メモー芝橋

○西岡メモーコ近藤

(本数勝ち) 2城ノ内、小松島高2
(本数勝ち) 2脇町

【女子】

▽1回戦 池田4-1那賀、城ノ内3-2城南、新野3-1海南、城北3-1日和佐、徳商4-1城東、生光5-0鳴商、鳴門5-0美馬、名西2(本数勝ち)2穴喰

▽2回戦 富岡東5-0池田、城ノ内3-2阿波、市立3-2新野、富西5-1城北、脇町5-0徳商、生光3-1小松島、鳴門5-0辻、川島5-0名西

第2日目

【男子団体】
▽準々決勝 富岡東4-1海南、小松島3-0市立、川島4-0生光、富西3-1那賀、富岡東、小松島、川島、富西が決勝リーグへ。

【女子団体】
▽準々決勝 富岡東5-0城ノ内、富西2-0市立、脇町4-0生光、川島4-0鳴門、富岡東、富西、脇町、川島が決勝リーグへ。

第3日目

【男子】
▽決勝リーグ

川島2-1富西、富岡東3-1小松島、小松島3-2富西、川島4-1富岡東、川島4-1小松島、富岡東4-1富西

○近藤メモー芝橋

○西岡メモーコ近藤

○西岡メモーコ近藤

○西岡メモーコ近藤

○西岡メモーコ近藤

▽順位 ①川島3勝 ②富東2勝
1敗 ③小松島1勝2敗 ④富西3
敗

▽個人決勝リーグ

①福多博史(富西) 3勝、②岩原
(東工) 1勝2敗、③山田(川島)
1勝2敗、④松永1勝2敗→2→4
位は勝ち本数、決定戦による。

【女子】

▽決勝リーグ

①富東3勝、②脇町2勝1敗、③富
西1分け2敗、④川島1分け2敗→
3・4位は決定戦による。

▽個人決勝リーグ

①近藤加奈子(富東) 3勝、②工藤
(川島) 2勝1敗、③楠(富東) 1
勝2敗、④川人(脇町) 3敗

◆第17回県中学校剣道選手権大会

(6月26日鳴武)

【男子】

▽1回戦 松茂2→1心神、南部4
→0大麻、附属5→0鳴門二、北島
3→1文理、山川4→0徳島、富田
3→1板野、川島(棄権)日和佐、
驚敷4→1津田、新野2→0江原、
石井1(代表戦勝ち)1上八万、加
茂名2(代表戦勝ち)2阿南二、入
田5→0羽浦、藍住東2→1半田、
上板3→1国府、高浦2→0脇町、

阿南一5→0池田一、穴吹(棄権)

山城、北井上4→0勝浦、鳴門一4
→0池田、那賀川4→1城西、坂野
2(本数勝ち)2川内

▽2回戦

阿波4→1松茂、南部4→1附属、
北島3→1小松島、相生2→1山川、
市場5→0富田、阿南5→0川島、
新野2→0驚敷、藍住4→1石井、
木頭4→1加茂名、入田3→1藍住
東、八万4→1上板、阿南一2(代
表戦勝ち)2高浦、穴吹3→2宮浜、
海南5→0北井上、那賀川1(代表
戦勝ち)1鳴門一、鴨島一4→0坂
野

▽3回戦 阿波4→1南部、相
生2→1北島、阿南3→1市場、藍
住3→0新野、木頭3→0入田、阿
南一2→0八万、穴吹3→1海南、
那賀川3→0鴨島

▽準々決勝
阿波3→1相生、阿南2→1藍住、
木頭3→1阿南一、那賀川1(本数
勝ち)1穴吹

▽準決勝

阿波3→1阿南 阿南 南
木頭3→1那賀川 那賀川 南

▽決勝

阿波3→1木頭 木頭 南
兼松 藤田

○秋山メド→中田

○塩田ドド→早川

○中川ドメ→西岡

西条 →メコ 中野○

【女子】

▽1回戦 勝浦4→1南部

▽2回戦

木頭5→0城西、松茂(棄権)
山城、羽浦(棄権)上八万、附属4
→1池田一、那賀川5→0徳島、海
南4→1国府、阿南4→1小松島、
阿南一2→1勝浦、市場4→0富田、
北井上(棄権)日和佐、穴吹1(代
表戦勝ち)1板野、山川5→0藍住
東、鴨島一4→1加茂名、入田3→
0石井、上板(棄権)津田、阿波5
→0八万

▽3回戦 木頭4→1松
茂、附属3→1羽浦、那賀川2(代
表戦勝ち)2海南、阿南一4→1阿
南、市場2(本数勝ち)2北井上、
山川2(代表戦勝ち)2穴吹、鴨島
一2(代表戦勝ち)2入田、阿波5
→0上板

▽準々決勝 木頭5→0
附属、阿南一2→1那賀川、市場3
→2山川、阿波4→1鴨島一

▽準決勝

木頭5→0阿南一 阿南一
阿波3→2市場 市場 南

▽決勝

木頭3→1阿波 阿波 南
木頭 秋山

○大城コ→栗栖○

○小篠千→田島

○前浦一→坂東

○前浦志コ→

○小篠香 コ→ 吉村

◆第42回県中学校総体剣道競技

(7月24日城西中)

【男子団体】

▽1回戦 鴨島一4→0池田一、八
万4→1勝浦、坂野3→0附属
▽2回戦 阿波3→2北島、穴吹3→
2高浦、入田2(本数勝ち)鳴門一、
鴨島一2(代表戦勝ち)2宮浜、阿
南一4→1八万、相生4→1牟岐、
藍住3→2池田、木頭5→0坂野

▽準々決勝 阿波5→0穴吹、鴨島
一3→1入田、相生2→1阿南一、
木頭4→1藍住

▽準決勝
鴨島一4→1阿波
木頭2→1相生

▽決勝

木頭2→2鴨島一 鴨島一
藤田下→植木

○中野メコ→影山

○西岡→反田村○

○早川→北川○

○中野メコ→影山

木頭は2年連続4度目の優勝。

【同個人三年】

▽3位決定戦
杉本ドメー 秋山 (阿波)

▽決勝
近藤メメー ド中川 (阿波)

(宮浜)
【同二年】
▽3位決定戦
西条コー 矢代 (藍住)

(阿波)
▽決勝
銭形ココメ 久田 (阿波)

(高浦)
【同一年】
▽3位決定戦
喜多メメー 渡辺 (入田)

(木頭)
▽決勝
天羽メー 松村 (入田)

(阿南一)
【女子団体】
▽1回戦 木頭5-0海南、勝浦3-1鳴門一、山川3-2南部、阿南4-1穴吹、那賀川4-1山城、北井上5-0板野、小松島3-2附属、阿波5-0石井

▽準々決勝
木頭5-0勝浦、阿南5-0山川、那賀川3-1北井上、阿波4-1小松島

▽準決勝
木頭 3-1 阿南一
那賀川 3-2 阿波

▽決勝
木頭 3-1 那賀川

○小篠千メー 岡本
○大城 コメー 長尾
○前浦一メー 松岡
前浦志メー ココ 渡川○
小篠香メー 吉岡

木頭は2年連続2度目の優勝。
【同個人】
▽3位決定戦
前浦一メコー 田島 (阿波)

(木頭)
▽決勝
吉岡メー 宗本 (山川)

◆第6回県教員・警察・実業団対抗剣道大会 (7月31日鳴武)

◆全日本選手権県予選 (8月28日鳴武)

▽準決勝
近藤メー 藤本 (県警)

米倉コ反ー コ河田 (富岡東高教)

(県警)
▽決勝
米倉メメー 近藤 (脇町高教)

【男子初段】
▽3位決定戦
田中メメー 中浦 (那賀高)

(富岡東高)
決勝
吉田メメー 小野 (小松島高)

(脇高)
【同二段】
▽3位決定戦
前田メドー 八木 (城北高)

(那賀高)
▽決勝
小川メー 島田 (川島高)

(富岡東高)
【同三段】
▽3位決定戦
喜多メドー 合田 (徳島文理大)

▽決勝
岡川コー 東内 (徳島錬心館)

【同四段】
▽3位決定戦
岩木メコー 松本 (大塚製菓)

(鳴門支部)
▽決勝
玉田メー 佐賀 (県警)

【同五段】
▽3位決定戦
平尾メメー 四宮 (県警)

▽決勝
吉田ツッー コ福多 (小松島高教)

【同六段】
▽3位決定戦
吉田メー 本田 (小松島支部)

(県警)
▽決勝
近藤メコー 河田 (富岡東高教)

▽決勝

小 藪 メ ヨ ー 太 田

(富岡東高) (鳴門高)

【同二段】

▽3位決定戦

大 和 コ メ ー 近 藤

(徳島大) (徳島大)

▽決勝

吉 岡 メ メ ー 折 上

(富岡西高) (富岡東高)

【同三段以上】

▽3位決定戦

藤 井 コ ー 松 田

(川島高剣友会) (名西支部)

▽決勝

島 野 メ ヨ ー メ 米 倉

(名西支部) (阿波支部)

◆第9回県女子剣道大会

(9月15日鳴武)

【高校個人】

▽段外の部 ①林崎美紀(小松島)、

②吉成(小松島)、③田原(小松島)

▽初段 ①野崎麻紀(脇町)、②

米倉(脇町)、③井内(脇町) ▽

二段準決勝 折上(富東) 2-1 近

藤(富東)、八幡(市立) 2-0 吉

岡(富西) ▽決勝 八幡 1-0 折

【一般団体】

▽1回戦 阿南0(代表戦) 0 四国

女大A、鳴門教育大A 3-0 板野西、

右武館 2-0 小松島A、徳島大 2-

1 麻植、四国女大B 2-1 名西、小

松島教員 3-0 青少年センター、鳴

門教育大B 2-1 小松島B ▽準々

決勝 鳴門教育大A 1(内容勝ち)

1 阿南、右武館 2-1 徳島大、小松

島教員 2-1 四国女大B、川島高剣

友会 3-0 鳴門教育大B ▽準決勝

右武館 2-1 鳴門教育大A、川島

高剣友会 2-1 小松島教員 ▽3位

決定戦 小松島教員 2-1 鳴門教育

大A ▽決勝 川島高剣友会 3-0

右武館

【同個人】

▽段外の部 ①長谷川陽子(小松島)、

②小泉(鳴門教育大) ▽二段以下

①大和昭美(徳島大)、②田川

(鳴門教育大)、③勝浦(名西)

▽三段以上準決勝 米倉(笠井整形)

1-0 藤井(川島高剣友会)、手塚

(徳島) 2-1 沢辺(小松島) ▽

3位決定戦 沢辺 2-0 藤井 ▽決

勝 手塚 2-0 米倉

◆第3回県高齢者剣道大会

(9月18日鳴武)

【団体】

▽1回戦 ○阿南-板野、○親道館

○鳴門、○海部-名西 ▽準決勝

○阿南-親道館、○徳島-海部 ▽

決勝 ○阿南-徳島

【個人】

▽A組(70歳以上) ①石井克太郎

(徳島)、②蝦名(小松島)、③平

岡(海部)、出口(板野)

▽B組(65-69歳) ①広瀬清(名西)、

②乾(麻植)、③平尾(麻植)、高

田(板野)

▽C組(60-64歳) ①株木芳夫(阿

南)、②遠藤(阿南)、③浜田(阿

南)、美馬(名西)

◆第17回社会人剣道大会

(10月2日鳴武)

▽決勝 トーナメント1回戦 鳴門高

剣友会 3-2 海部支部A、相生支所

3-1 鳴門支部B、阿南支部A 4-

0 和友会、小松島支部 2-2 海部支

部B-本数勝ち

▽準決勝

鳴高剣友会 4-0 相生支所

阿南支部A 3-1 小松島支部

▽決勝 阿南支部A 3-1 鳴高剣友会

上 田 ー メ メ 西 宇 ○

○中山 メ ヨ ー 端 村

○河田 ド メ ー メ 乾

北 條 メ ー メ 村 上

○遠 藤 コ ー 山 田

◆第22回県高校剣道選手権大会

(11月13日徳農体)

【男子】

▽決勝 トーナメント1回戦 福井

(富岡東) - 谷口(富岡西)、前田

(富岡西) - 近藤(富岡西)、長井

(川島) - 松岡(富岡西)、小川

(富岡東) - 藤田(富岡西) ▽準

決勝 福井-前田、小川-長井 ▽

3位決定戦 長井-前田

▽決勝 福 井 メ ー 小 川

【女子】

▽決勝 トーナメント1回戦 近藤

(富岡東) - 米倉(脇町)、田上

(富岡東) - 野崎(脇町)、西(富

岡東) - 鈴木(富岡東)、八幡(徳

島市立) - 井内(脇町) ▽準決勝

近藤-田上、八幡-西 ▽3位決

定戦 西-田上

▽決勝 近 藤 メ ー 八 幡

◆第一回県大学選手権眉山杯

(11月20日徳大休)

【男子】

▽準決勝

合 田 コメー コ 藤 野

(徳島)

兼 近 コー

(文理)

▽決勝

兼 近 メコー ド 合 田

【女子】

▽準決勝

住 友 ドメー コ 中 本

(文理)

阿 部 メー

(文理)

▽決勝

阿 部 メコー 住 友

◆48国体県小・中学校剣道強化錬成大会 (12月11日鳴武)

【男子】

▽小学校六年

①野田圭介(大野小)、

②平(延野ク)、③吉田(山川ス)、

谷口(徳島錬心館) ▽中学一年

①天羽将文(阿南二)、②原田(文

理)、③石田(八万)、川添(小松

島)

【女子】

▽小学校六年 ①前浦幸代(北川ク)、

②株田(木頭錬心館)、③田室(加

茂名)、谷本(羽ノ浦) ▽中学一

年 ①前浦志津代(木頭)、②酒巻

(阿波)、③大城(木頭)、森(小

松島)

(男子一五七人、女子八六六人、計

二四三人が参加)

◆第33回県高校剣道新人大会 (1月15日鳴武)

【男子】

▽1回戦 城北4-1阿波、阿南工

4-1城東、城ノ内3-2徳島市立

▽2回戦 富岡東4-1城北、脇

町(棄権) 徳島農、生光学園4-1

実喰商、小松島5-0徳島東工、川

島3-2阿南工、那賀4-1海南、

城南(棄権) 貞光工、富岡西4-1

城ノ内 ▽準決勝 富岡東4-1

脇町、小松島5-0生光学園、川島

2-1那賀、富岡西4-1城南

▽準決勝

富岡東 2-1 小松島

富岡西 3-1 川島

▽3位決定戦

川島 3-1 小松島

▽決勝

富岡東 3-2 富岡西

田中 1-2 藤田

○近藤 コー 谷口

○小川 コー 松岡

岡崎 1-2 前田

○福井 メー 近藤

▽1回戦 富岡西3-1小松島、城

ノ内3-1城北、城南3-1日和佐、

川島4-1実喰商、城東4-1鴨島

商 ▽準決勝 富岡東3-0富岡

西、城ノ内2-1城南、脇町3-2

川島、徳島市立3-2城東

▽準決勝

富岡東 5-0 城ノ内

脇町 3-2 徳島市立

▽3位決定戦

城ノ内 3-1 徳島市立

▽決勝

脇町 3-1 富岡東

篠原 1-2 折上

○野崎 コー 田上

○中野 コー 小藪

井内 1-1 鈴木

○米倉 コー 近藤

◆第6回県スポーツ少年団剣道大会

兼第11回全国スポーツ少年団剣道

交流大会県予選(1月16日鳴武)

【男子】

▽小学校四年 ①仁木隆夫(大野城

山)、②湯浅(阿南教室)、③三木

(小松島ク) ▽同五年 ①松浦史

芳(鴨島教室)、②太田(坂野ク)、

③藤村(阿南教室) ▽同六年 ①

弘田幹(小松島ク)、②近藤(高浦

教室)、③高浜(高浦教室) ▽中

学校 ①檜原大輔(市場教室)、②

川添(小松島ク)、③矢代(藍住)

▽高校 ①園田慎吾(和田島ク)、

②川端(藍住)、③瀬野(市場教室)

【女子】

▽小学校四~六年 ①敷田美紀(那

賀川)、②陶木(那賀川)、③松田

(坂野) ▽中学校 ①山崎砂織

(阿南教室)、②河野(藍住)、③

宗本(山川町)

◆第12回県中学校剣道新人大会 (1月22日鳴武)

【男子】

▽1回戦 加茂名2-1阿南二、文

理3-0瀬戸、高浦4-1板野、穴

吹4-0津田、宮浜5-0城西、応

神(棄権) 平谷、新野2(本教勝ち)

2山川、川島2-1半田、上八万

(棄権) 牟岐、富田2(本教勝ち)

2松茂、上板3-0徳島、小松島3

1大麻、池田(棄権) 藍住東、鴨

島1-3-1城東、北井上3-2勝浦、

海南5-0川内、附属3-1鳴門二

▽2回戦 阿波2-1加茂名、高

浦3-0文理、入田1(本教勝ち)

〔県外〕

◆四国高校剣道選手権

(6月18・19日高知市)

第1日目

〔男子団体〕

▽予選リーグA組 尺誠学園2-1 富岡東、新田4-0岡豊、富岡東2 (ポイント勝ち) 2岡豊、新田4-1尺誠学園 ▽B組 高松北4-0小松島、今治南5-0高知、高松北4-0今治南、高知4-1小松島

〔女子個人〕

▽C組 学芸1 (ポイント勝ち) 1宇和島東、川島2 (ポイント勝ち) 2高松南、学芸2 (ポイント勝ち) 2高松南、川島2-1宇和島東 ▽D組 松山西2-1明德義塾、富岡西3-1琴平、松山西2-0富岡西、明德義塾3-2琴平

予選リーグ3回戦のうち2回戦まで終了。

〔男子個人〕

▽決勝 三崎メー 福田 (新田) (琴平)

〔女子団体〕

▽予選リーグA組 済美2 (引き分け) 2尺誠学園、明德義塾3-2川島、川島2-1済美、尺誠学園2 (ポイント勝ち) 2明德義塾 ▽B

組 高松南5-0南宇和、富岡東3-2中村、高松南5-0中村、富岡東5-0南宇和 ▽C組 脇町4-1岡豊、宇和島東4-1香川中央、脇町3-2香川中央、宇和島東5-0岡豊 ▽D組 高知商2-1 (ポイント勝ち) 2富岡西、高松一2 (ポイント勝ち) 2八幡浜、高知商2-1八幡浜、富岡西2-1高松一

予選リーグ3回戦のうち2回戦まで終了。

〔女子個人〕

▽準々決勝 近藤メー 諏訪 (富岡東) 伊井メー 楠 (高松) (宇和島東) ▽準決勝 村上メコーメ近藤 (済美)

第2日目

▽予選リーグA組 ①新田3勝、②尺誠2勝1敗、③富岡東1勝2敗、④岡豊3敗 ▽B組 ①高松北3勝、②今治南2勝1敗、③高知1勝2敗、④小松島3敗 ▽C組 ①川島3勝、

1穴吹、藍住2-0宮浜、八万4-1応神、南部2-0新野、驚敷4-0川島、阿南2-0上八万、那賀川4-0富田、鳴門一4-0上板、小松島2 (代表戦勝ち) 2相生、阿南一1-0池田、市場3-1鴨島一、羽浦2 (本数勝ち) 2北井上、北島2-1海南、木頭5-0附属 ▽3回戦 阿波3-2高浦、藍住3-2入田、八万2-1南部、阿南4-1驚敷、那賀川2-1鳴門一、阿南一3-0小松島、市場4-0羽浦、木頭4-0北島 ▽準々決勝 阿波2-1藍住、阿南2-1八万、那賀川2-1阿南一、木頭3-1市場 ▽準決勝 阿波3-1阿南、木頭3-1市場

井、小松島3-2藍住東、附属3-2池田、山川5-0津田、勝浦5-0上八万、北島4-1国府、南部3-0海南、阿南一5-0加茂名、入田2 (本数勝ち) 2阿南、那賀川1 (本数勝ち) 1穴吹、文理2-1藍住、阿波5-0城西 ▽2回戦 木頭4-0上板、市場3-2北井上、鴨島一4-1小松島、山川2-1附属、勝浦3-1北島、阿南一2 (代表戦勝ち) 2南部、入田4-0那賀川、阿波5-0文理 ▽準々決勝 木頭3-2市場、鴨島一1 (代表戦勝ち) 1山川、勝浦2-1阿南一、阿波2-0入田

▽準決勝 木頭4-1鴨島一

阿波3-1阿南

那賀川2-0木頭

▽決勝 木頭4-0阿波

稲岡 1-1 阿波

數田 引き分け 庄村

原岡 引き分け 兼松

岸本 引き分け 黄田

磯部 メー 福家

〔女子〕

▽1回戦 木頭 (棄権) 川内、上板

4-1瀬戸、市場3-2富田、北井

上 (棄権) 鳴門一、鴨島一4-1石

②学芸2勝1敗、③高松南1勝2敗、
④宇和島東3敗 ▽D組 ①松山西
3勝、②富岡西2勝1敗、③明德義
塾1勝2敗、④琴平3敗

▽準決勝

高松北 3-1 新田
川島 2-1 松山西

長井

吉田 1-1 田所
北村 1-1 霧田

十川

山田 1-1 川染
山下 1-1 井上

▽決勝

高松北 4-1 川島
○銭谷 1-1 長井

○井口

川西 1-1 吉田
○本田 1-1 北村

○宮本

高松北は初優勝。
高松北は初優勝。

【女子団体】

▽子選リーグA組 ①川島2勝1敗、
②済美1勝1分け1敗 ③尺誠1勝
1分け1敗 ④明德義塾1勝2敗

2・3位は勝者数による ▽B組

①富岡東3勝、②高松南2勝1敗、
③中村1勝2敗、④南宇和3敗 ▽
C組 ①宇和島東3勝、②脇町2勝
1敗、③香川中央1勝2敗、④岡豊
3敗 ▽D組 ①高知商3勝、②富

岡西2勝1敗、③高松一1勝2敗、
④八幡浜3敗

▽準決勝

高知商 2-1 川島
松田 1-1 芝崎

○浜田

橋田 1-1 近藤
○塩見 1-1 反尾

○塩見

吉川 1-1 齊藤
代表戦 1-1 工藤

代表戦

松田 1-1 工藤
富岡東 2-1 宇和島東

○近藤

西岡 1-1 善家
○折上 1-1 成田

○折上

田上 1-1 谷口
楠 1-1 三木

楠

▽決勝
富岡東 3-1 高知商

▽決勝

近藤 1-1 松田
○西岡 1-1 浜田

○西岡

折上 1-1 橋田
田上 1-1 塩見

田上

富岡東は2年連続2度目の優勝。
富岡東は2年連続2度目の優勝。

▽個人準々決勝

池田 1-1 宗本
北川 1-1 小篠香

池田

▽決勝
谷本 1-1 北川

▽決勝

②高知2勝1敗、③愛媛2勝1敗、
④徳島3敗 1-3位は本数による
香川は2年連続11度目の優勝。

▽学校対抗リーグ戦

①広見(愛)
2勝1敗、②木頭2勝1敗、③香東
(香) 1勝2敗、③高知(高) 1勝
2敗 1・2位は本数による

▽学校対抗リーグ戦

広見は初優勝。
▽個人準々決勝

▽個人準々決勝

和田龍 1-1 中田
立岩 1-1 杉本

立岩

(香川) 1-1 杉本
静納 1-1 立岩

静納

▽学校対抗リーグ戦 ①紫雲(香)
2勝1分け、②木頭2勝1分け、③
河北(愛) 1勝2敗、④高知(高)
3敗 1・2位は本数による

▽学校対抗リーグ戦

紫雲は初優勝。
▽個人準々決勝

▽個人準々決勝

池田 1-1 宗本
北川 1-1 小篠香

池田

▽決勝
谷本 1-1 北川

▽決勝

◆第18回全国中学校選抜剣道大会
(8月24日宮城県)
(仙台市体育館)

◇剣道

▽子選リーグ
木頭 3-1 北茂安
(徳島) 1-2 小山第三

▽子選リーグ

木頭は2戦2勝で決勝トーナメン
トへ進出。
▽決勝トーナメント1回戦

▽決勝トーナメント1回戦

藤見 3-0 木頭
(新潟)

藤見

○木村 1-1 藤田
○藤塚 1-1 中田

○木村

○大関 1-1 早川
佐藤 引き分け 西岡

○大関

藤塚 引き分け 中野
▽同決勝
高千穂 3-1 勝浦

▽同決勝

高千穂は8年ぶり2度目の優勝。
高千穂は8年ぶり2度目の優勝。

▽子選リーグ

木頭 2-2 大谷場
(徳島) 本数勝ち (埼玉)

▽子選リーグ

阿蘇 2-0 木頭
(熊本)

阿蘇

進出成らず。

◆第43回国民体育大会剣道競技

(10月16～18日京都市)

【少年の部】

▽1回戦

東 京 3 ー 1 徳 島

○松 本 メメーメ 長 井

小 川 ー ー 下 香 川 ○

○黒 田 メメー 北 村

○松 澤 コメー 松 永

河 本 コー ー 下 福 多

【成年の部】

▽1回戦

徳 島 3 ー 2 新 潟

○平 野 コー ー 吉 田

近 藤 ドー ー 梅 瓶 ○

○西 谷 コー ー 萬 歳

○坂 下 メメー 佐 野

高 下 ー ー 山 崎 ○

▽2回戦

鳥 取 3 ー 2 徳 島

池 田 ドー ー 平 野 ○

山 中 ー ー 近 藤 ○

○木 下 ココー 西 谷

○湯 村 ツー ー 坂 下

○香 田 メコー ー 高 下



編集後記

◇ 「啐啄同時」という言葉がある。

ひな鳥が、たまごの殻を破って生まれてようとする時、外から親鳥がつつくのを「啄」といい、内から、その同じところをひな鳥がつつくのを「啐」という。この外からの啄と、内からの啐とが一致した時、はじめて殻が破られて、ひな鳥が生まれるのである。これを「啐啄の機」という。

剣道の指導でも同じ事が言えよう。生徒の能力を最大限に伸ばしていうとする指導者側の熱意や働きかけと、生徒自身が精一杯、学んできこうとする姿勢が一致した時に、大きな成果がある。

従って、指導者は常に生徒の現状を正確に知っておかなければならぬ。今、生徒がどのような状態にあるのか、何を望んでいるのか。48国体の開催に伴い、中卒生の強化が行われて

生徒の持つ能力を最大限に伸ばしていきけるよう望みたい。

◇ 昭和五十九年に、徳島県教育委員会体育保健課に国体準備係が設置

されてから、六年目。各競技団体とも着々とその準備を進めている。剣道連盟では、競技運営に関して先催の实情を把握するため、十月の京都国体に十数名の視察員を派遣。さまざまな角度から大会運営、特に裏方の動きを勉強してきた。本年度から二巡目の国体開催ということ、必要以上のサービスマンや華美を競うという姿勢もみられず、比較的質素な大会運営方針であったように思えた。

強化に関しては、少年の部の主力になる中学生の県外遠征が繰り返された。兵庫、広島、九州とそれぞれレベルの高い錬成会に参加し、全国の強豪と対戦し、腕を磨いた。

また、十月にはPL学園高校剣道部監督川上岑志先生を、三月には大阪体育大学剣道部監督作道正夫先生をそれぞれお迎えし、指導者・生徒

とも研修に励んだ。

このように、48国体に向け一歩一歩と準備を進めてきている。このような動きの中で、慣例となっている開催地優勝のプレッシャーはあるが、「剣道の理念」を見失うことなく歩んでいきたい。

作道先生の講話の中に、剣心のやせ細りというお話があったが、心置きざりにした強化になってしまっ

ては、勝負には勝ったが結果として得るものより失うものの方が多かったという事にもなりかねない。国体に関わるすべての剣道人が、本質を見失わず、協力して半世紀に一度の大事業に臨みたい。

◇ 機関誌「徳島の剣道」も第五号の発刊となった。徳島県内の剣道愛好家が興味を持って読める本を、何か調べたいものがあつた時に近くにある便利な本を、大会の記録やいろいろな情報の掲載された本を、そんな思いを胸に五年間編集を続けてきました。

今回、公務の都合で編集の仕事を終らせていただくことになりました。

五年間「徳島の剣道」発行に際しまして、ご多忙中にもかかわらず原稿の執筆等、ご協力いただいた方々に感謝の意を表します。有難うございました。

(石井 博)

発刊日 平成元年五月二十日

発行所 徳島県剣道連盟

編集 徳島県剣道連盟広報部

印刷所 グラソンド印刷